三文文誌
2021
生徒会誌
新入生歓迎号

三文文士会　2021年新入生歓迎号　目次

夏樹「生き急げオールドファッション」…… P.3

小田たつえ「三月二十三日」…… P.6

目盾二十一「新釈・羅生門」…… P.9

狐狸野　類「心象は我が儘に」…… P.12

水面「Re:d」…… P.15

桜照月「希望」…… P.18

南風こまち「夜の雨」…… P.23

遥　弥生「死んでしまったユウリの話をしよう」…… P.30

生き急げオールドファッション

夏樹

新しい新人が弊社に入社した。

いやでも新「人」と呼んでいいのかどうかはわからない。なんせそいつは人工知能を持ったロボットで、人間とは一線を画す存在だからだ。何年も前に弊社のお偉いさんが『人工知能ロボットの雇用化』を打ち立てて以来、職員のロボット比率はとんでもないことになった。基本的な感覚器官が人間と同じであることを前提として、腕が蜘蛛よろしく六本生えているもの、人の気持ちとやらを備えているもの、食べたものをエネルギー変換できるもの、有象無象が働いている。

おそらく新しい奴は、この間開発された最新モデルのうちの一人なのだろう。……一「人」？　ああ、もうどうでもいいや。面倒くさい。仕事ができれば人でもそうでなくても、俺は構わない。

「新しく入りましたオノダです。よろしくお願いします、先輩」

にこにこと、人好きしそうな笑みを浮かべる、真新しい作業着の青年。軋みもなく差し出される手。

「……はい、よろしく。フジノです」

わざわざ休憩中に声かけてくんな、と一蹴してやりたかったがそういうわけにもいかない。オノダね、と口の中で反芻して、差し出された手を渋々握る。血液が通っていないからか、皮膚に似たなにかはひやりとしていた。

「手つめたいね」

「そうですか？　先輩はあったかいですね」

指摘された自分の手に触れてみると、思いのほか熱を持っている。オノダと比べるからか。

「今日からだっけ。仕事慣れそう？」

会話のとっかかりを探そうと、口の端を無理やり緩ませて尋ねる。俺の問いに数度瞬きしたオノダは、理解ができないと言いたげに首を傾げていた。

「慣れるも何も、流れを学習するだけなので」

人工知能を持ったロボットを雇用するメリットの一つとして、新人教育の不要が挙げられる。作業内容の取得が著しく速いのだ。少し昔なら『飲み込みが早い』なんて言葉で言い表すのだろうが、今はもはや飲み込みなんてレベルじゃない。学習させてしまえば一発で覚え、削除しない限り忘れることはない。加えて俺とオノダの作業はひたすら同じことを繰り返す反復作業だ。慣れるなんてこと、考える必要すらない。

「さすが最新型ロボットだねえ」

思いがけず後ろ向きの感情が声に混ざる。気づいているのかいないのか、模範解答の笑顔が返ってきた。

「ええ。バッテリー長持ちなんですよ」

スマートフォンの宣伝文句かよ。充電も短時間で済むんですよ、とオノダがまた笑った。

昔人間を支配していたスマートフォンは、来年あたりには近代史として教科書に名が刻まれるらしい。欠けた赤い実の生みの親は、はたして喜んでいるのだろうか。

なんにせよ、バッテリー長持ちは労働にうってつけだ。

「まあ頑張れよ。じゃあ俺、仕事戻るから」

「え？　もうそんな時間ですか？」

作業着の裾を捲って文字盤を見せてやると、オノダもそっくり同じことをしてきた。弊社で支給されている腕時計。安っぽい露店の景品みたいなやつ。まるっきり同じ外見だが、よく見ると俺とオノダの文字盤が一致していなかった。約十五分、俺の方が先を急いでいる。

「あれ？　悪い。狂ってたみたいだわ」

「いえ。まあ機械ですから」

「それを機械が言うかね」

太陽が出勤を知らせて、月が退勤を促す。何日も何ヶ月も何年もそんな生活を続けていると、もはや何も考えなくなっていた。ロールプレイングゲームの主人公ってこんな気持ちなのだろうか。いや村人Aの方が近いか。

最近俺は感情や脳を動かすことを放棄した。思考なんて持ち出すだけでエネルギーの無駄死に。いくら頭で考えたって机上の空論。どんなに共感したって所詮他人の不幸は一つのエンターテインメントだし、他人の幸福は妬みのコンテンツ。見渡せば仕事を黙々とこなすロボットのみの空間で感情豊かに過ごす余裕も意味もない。省エネ、エコ、時短、そんなものを高らかにうたう社会に適合してやった方がはるかに楽だ。

「どうしたフジノ、顔死んでんぞ」

休憩中長椅子に座り込んでいたら、同期が顔を覗き込んできた。元気な声が脳をガンガン打ち鳴らす。

「大きい声出すなよ、頭に響く……」

「調子悪いのか」

力なく頷くと、視界にはリノリウムの床。

頭部の中で一定間隔の痛みが走っている。ここ最近ずっとそうだ。業務に支障はきたしていないが、集中力が途切れることが増えた。ごくたまに意識も途切れる。

「俺も最近調子悪いけど、まあこんな生活だしな」

そういえば俺以外にも、調子の悪そうなものは何名かいた。こいつを含めた同期も先輩も。おかげで最近はやつれた顔が多くて鏡要らずだ。たぶん部屋の鏡を破壊しても何ら支障がない。

「あとあれだ、季節の変わり目」

「馬鹿、もう今が何日かもわかってねえよ」

春夏秋冬の移り変わりなど、とうの昔に感じなくなった。朝と夜だけわかっていれば、もっと言うと腕時計の文字盤が読めれば生活できるのだから。

「フジノ、今何時だ？」

腕時計を見つめているくせに、何故聞いてくる。

「あー……俺最近時計進んでんだよな。計算するわ」

「え、フジノも？　俺も時計進んじまっててさあ。今真夜中」

「やったじゃん、帰れるな」

確か昨日は二十分ほどの進みだった。でも今日の朝は三十分になっていた。今この時計は何分生き急いでいるんだろうか。文字盤はとっくに休憩時間を終了させていた。

「早くて怒られることもないだろうし、もう戻るか」

「社会に貢献してるな、俺たち」

「ほんとにな」

退勤を知らせるベルが咆哮する。今夜も月は出ているだろうか。窓を覗こうとして、思ったよりやつれ果てた自分の顔に驚いた。こんな顔をしていたのかと自分の頬をさするが、ざらついて熱を持っていることしかわからない。

「おう、お疲れさん」

「……先輩、お疲れさまです」

がしゃがしゃ姦しい大量の腕と共に、同じ作業着の男が窓に映った。ふだん俺の後ろのラインで作業している蜘蛛もどき。入社したときにその腕全てが俺と握手を求めてきたものだから、ちょっとした握手会になったことを覚えている。先輩のラインは真っ先に仕事を終えることで有名だし、俺もそれを尊敬してはいる。いるが、六本の腕が見事に異なる仕事をやってのける様は、傍から見ていてすこし気味が悪い。

「聞いてくれよ。俺のライン人が減っちまってさ」

「へえ」

「なんだよノリ悪いな」

「調子悪いもんで、すいません」

不服そうな顔をしていた先輩が、俺も俺もと何本か手を挙げた。挙げる腕は一本でいいだろうに。振り返って先輩の顔を見つめると、いくつかの手のひらがが俺の目を覆うように開かれる。またいくつかが、それを退けた。

「まあこんな環境じゃあな、しょうがねえべ」

そう言ってけらけらと白い歯をのぞかせるその男は、いつも通り元気そうに見えた。

「あ、俺急がなきゃならねえんだ。今日ドラマの最終回なんだよ」

「あらら、お疲れさまです」

「間に合うかな。今何時だ？」

先輩がどたばた腕時計をはめた腕を探している様は、さながら千手観音に近しい。時計見してくれ、と腕を掴まれたが、俺の文字盤を覗き込んであからさまに顔が歪んだ。

「んだこれ、何時間進んでんだ？　遅れてんのか？」

「もうわかんないっす。自分の見た方がいいですよ」

というか腕時計はめてる腕ぐらい覚えとけよ。

「悪かったな、俺あんま時計見ねえんだよ」

俺の思ったことが顔にでも出てしまったか、先輩が不貞腐れてしまった。先輩が唇を尖らせて腕を確認しているので、俺も残りの腕を確かめてやる。右半身の真ん中の腕に、そいつは光っていた。

「あれ？　先輩」

「なんだ、あったか？」
「あることにはありましたけど、お釈迦ですね」
短針も長針も、果ては秒針まで御陀仏。ほら、と文字盤を先輩に向けてやると、別の腕がわなわなと蠢いた。なんだその動き。
「マジかあ。これって上に言えば変えてもらえんの？」
「どうなんですかね。言ってみたらいいんじゃないすか」
落胆する先輩のすぐ側で、腕が別の生き物のように動いていた。関節が軋むのも構わずに、うじゃうじゃ絡む。
俺の視線に気づいた先輩が自分の腕を見つめて、それからへらりと笑った。
「な？　調子悪いだろ。最近よくこうなる」
「腕ぶった切ったらどうですか」
「馬鹿、おまえ」
ぐ、と俺の腕に痛みが走って、思わず先輩の腕を跳ね退けた。腕時計ごと力の限り握り込まれたようで、ガラスにややヒビが入っている。悪い、と謝る先輩から悪意は感じられない。腕が、自らの意志で行ったのだろう。おそらく俺の発言に怒りを覚えて。
「……これじゃ切れないですね」
「だろ。とんだじゃじゃ馬抱えちまったよ」

脳味噌がぼやけたようにうまく働かない。持ち場のベルトコンベアがやかましく流れていく。ガタガタ手を伸ばしてガタガタ赤と青のコードを繋げてガタガタ導線をガタガタガタガタ。煩い、煩いうるさいああやかましい。
昨日まで隣にいたはずの同期の場所が、今日はぽっかり抜け殻になっている。辺りにも間引きのごとくまばらな間隔が空いていた。どうりで今日は仕事が多いわけだ。調子が悪い時にこの仕事量はたまったものではない。指がもつれないように、何億と繰り返した動きをもう一回。
視界で一番遠くのラインでは、オノダが涼しい顔をして手を動かしている。目が霞むから本当にオノダか自信はないけれど。きっちりと等間隔に並べられたうちの一人になってしまうと、オノダという名前のラベルなんて最早意味をなさない。隣も一番端も同機種ならば、オノダとその他の違いなんて見つけられない。
少しの間動作を止めていたら、あっという間に流れが淀んでいた。慌てて下を向くと、溜まった色が俺を睨んでいる。赤と青のコードを、どうするんだったか。こめかみの辺りが鋭く痛む。この導線、どこに繋げればいいんだ。視界が霞んでぶれる。指の動かし方は、どうすれば。機械の音が杭のごとく脳味噌を貫く。呼吸は。重低音が鈍器に代わって殴る殴る殴る。
休憩まであと何分なのか。縋る思いで腕時計を確認すると、俺より先に息の根が止まっていた。午前なのか午後なのか、いずれにせよはるか遠い時刻を指している。役に立たない傷ついた文字盤はしんと静まり返っていた。
あえぐように息をしゃくって顔を上げる。壁のどこかに時計が掛けてあったはずなのだ。左、右、どこだ。まっさらな壁が俺を嘲笑う。脳に響くのは機械音か、それとも俺の頭痛か。見つからない時計に苛立って後ろを振り返る、と。
蜘蛛もどきが一体たりともいなかった。
視界が歪んで、真っ暗になって、足から力が抜ける。ライン作業を強制停止するブザー音が、ぶつんと切れた。

廃棄処理場がせわしなく働いている。
「社長、また一体倒れました」
秘書が書類を捲りながら淡々と報告を行う。
「またか。今月何体目だ」
呆れた素振りでため息をつく社長の視界では、また一体焼却炉に投げ込まれていた。傷がついた腕時計と死んだ魚の眼が、揺らぐ光に照らされて消える。
「やはり新型を買って正解だったな。こう何体もお釈迦になってはかなわん」
うんうんとひとり頷いて、社長が自分の腕に視線を落とす。片眉上げて口端を歪めた。
「なんだ、もう十二時十分ではないか。昼を食わねば」
「かしこまりました。用意をさせます」
秘書がちらりと自分の時計を確認する。
そこでは、長針が短針を追いかけていた。

三月二十三日

小田たつえ

終業式の帰り道はほのかなピンクが空を埋めはじめていたけど、地面にもその姿があった。

ロッカーの空白を長らく埋め続けていた課題と成果の山は、いま私の手元を占領して筋肉という筋肉に運動を与え続けている。

「おーい、車道出てっぞー」

のんきでよろしい。勝手に言っててちょうだいな。こんな、持って帰ってもゴミ行きが確定しているものを持たせるのもいかがなものか。こうも重くちゃふらついて自然とでてしまうんですよ。

こういう時に家が近いのは助かる。数分苦労するだけで解放されるのだから。自転車組以上に得な気もする。自転車は荷物をのせるにも限度がある。今日はためにためた山の土たちを、いやがおうでも持って行かなきゃいけない。溜めずに分割して持って行けば、という声は聞かないことにしているんです。

左に曲がり、三つ目の十字路で歩道を渡って右。少し行ったところ。ゴール。鍵を開ける必要はない。何せ平日。母がいる。道を急ぐ同級生たちを背にして一言。

「ただいまー」

二階にものを上げる。自分の部屋は相変わらず足の踏み場もない。世にいうゴミ屋敷の一歩手前。何回も片付けろと言われたけど、手を付ける気すらおきない。今日も変わらず、荷物をぶちまけてベッドに倒れこんだ。

枕もとのスマホに近づく。通知がたまってた。って言っても、携帯会社のメールとか、ソシャゲの宣伝とかだけ。文章も見ないで消す。

「あ」

流れ作業で消してた通知に、LINEのやつが入ってた。アプリを開く。3件だけメッセージが入ってた。ポイント欲しさにいつか登録した企業のメッセが2つ。

「ん！」

オサムからだった。

――午後出かけん？

学校に持ってって使ってる。悪いやつめ。

――今帰った。ええよ

今返しても、少し返信には時間がかかるだろう。なにせあいつは自転車組。それも2キロくらい距離がある。重い荷物に苦しめられながら帰っているはず。帰りの道中じゃさすがに周りのこともあるだろうし、携帯を出すのは無理。

――おっけ、じゃあ2時半にボウリング場前で

こんなすぐに返信が来るとは思わなかった。周りに同級生とかいるんじゃないの……？

――りょうかーい。スマホ大丈夫なん？

どうしても気になって質問した。

――気にすんな、ばれなきゃ犯罪じゃない

女の子たるもの、やっぱり多少はおめかししたい。いつかに買った化粧品を机にぶちまける。教材がどんとあって、ほとんど上の面がない。お母さんがぽつぽつと教えてくれたことと、だいぶ前に仕入れた中途半端な知識をフル活用する。あと20分。ボウリング場が近いとはいえ、さすがにゆっくりしすぎた。化粧の時間は……7分くらい？その時、LINEが鳴る。

「今見る余裕ないぃ……」

鏡に目を向けつつ、カバンの場所を探す。足元。持ってく必要のあるものは、たぶん入ってるからヨシ。

「……おっけ！」

急造の顔面に自身は無いが、ないよりはマシの精神だ。どったんばったんと階段を降り、新しいハンカチを玄関で取って、靴はいて。

「母、でかけるねー！」

「帰るとき連絡しなさいよー、あと」

バタン！トタトタ……。

信号待ちでとっさに携帯を出す。さっきの通知が残っていた。オサムだった。着いたらLINE入れて、だそうだ。青信号。急げ私。

ボウリング場の看板が見えた。時間は、2時29分13秒。ぎりぎりで間に合ったって言える。看板の下にたどり着く。二十九分五十秒。ため息が出た。

――ついた

既読もすぐについた。看板の下、っていった方が良いかな。あ、来た。手を振る。気づく。にっこりして、おいでおいでされた。ぜえぜえの息を整えながら、軽めの足で行った。

「どしたよ、顔真っ赤」

「走ってきた」

「転ばなかった？」

「うん、だいじょぶ」

ボウリングは、やっぱりオサムのほうができる。あいつは百四十三で、私が九十二。

「やっぱ上手いね」

「サツキもできる方だと思うけどな。ほら、男と女で平均違うし」

そう言っても、勝ちたいんだよなあ。

「そうムスッとすんなって」

「だって」

「分かったよ、悪かったって」

「……どうしよね、この後」
「え、あ、そうだ……」
「なに？」
「また、この前みたいな状況なんだけど。いいかな？」
「また？そっか、大変だね」
オサムがうつむく。
「とりあえず連絡してみるよ」
「ありがと」
――オサムの家、またケンカして荒れてんだって。前みたく泊めていい？部屋空いてたっけ？
すぐ返信が来た。
――父いないから部屋大丈夫
――夕飯も作るからおいでって言っておいて
「大丈夫だって」
「悪ぃな」
「気にしないで」
こういう時に家が近いのは困る。なんともいえぬ雰囲気のまま家に上がんなくちゃいけない。まっすぐ行って、四つ目の十字路で右。少し行ったところ。ゴール。鍵を開ける必要はない。何せ平日。母がいる。不安そうなあいつに言う。
「どうぞ上がって」
　夕食はカレーだった。珍しく具材も豪華だった。奮発、っていうのだろうか。
「ごちそうさまです」
「いいのよ。ゆっくり食べるのは大事なことだから」
「ありがとうございます」
オサムはずっとぱくついていた。私もつられて、食べていた。
22時。
「二階の奥、使ってね。充電器とかそういうのもあるから使っていいからね」
「なにからなにまでありがとうございます」
母が下りていった。
「……じゃ、俺」
「あのさ」
「ん？」
「……わ、私の部屋、く、来る？」
「だめだよ、そんな」
「まだ寝るには早いでしょ？」
「……だったら、こっちの部屋来いよ」
「なんで」
「女子の部屋に入るのなんてダメだろ！」
「めんどくさいなあ。別になにするわけでもないし」
「でも何言われるかわかんないだろ、お母さん下にいるんだから」
「そういうの別に気にしないから」
だいたい、幼稚園からの腐れ縁みたいなやつ、何をいまさら。
「ダメだってやっぱ」
若干ムカついてきた。腕をつかんで引きずり込む。
「バカ！」
「あんたが考えすぎ！」
しかし、考えが甘かった。この時、私は自分の部屋のひどさを忘れていたのだ。ばたん、とあいつの倒れこむのと同時に戸を閉めた。明らかにあいつの顔面が赤くなっていた。
「そんなに気にしてんの」
黙りこくって何も言えないらしい。
「ほれ、汚いけどここらへんなら座っても大丈夫だから」
一気に体が緊張してきたらしく、正座するまでとんでもない時間がかかっていた。
　しばらくしても気恥ずかしさが抜けないらしく、そわそわしていた。
「……出てもいいからね」
もう体が言うことを効きません、立つのも大変なんです、みたいなことを訴えかけているらしい。
「……おまえさ、気にしないの？」
「何を？」
「自分の家に、異性泊めるの」
「あんたを男とかそういう目で見てないから。こんなずっと昔からのやつ」
「あぁ、そうなん、だ……」
「じゃあ逆に聞くけど、あんたは私をどう思ってるわけ？」
「いやそれは……」
「まさかあんた好きだとか言わないよね？」
黙った。
「違うでしょ？」
下を向いた。お顔が桜色に。
「……違うでしょ？」
ちょっとも動けそうになかった。
「……ほんとに……？」
「だ、だって」
「なに」
「お前、本当に優しい、から……」
「あんたねぇ、友達にやさしくするのは当たり前でしょ」
「女なのに？」
「友達に性別もなにも無い」
「そう、なのか……じゃあ、俺が勘違いしたバカってわ

けか」
「あぁ、でも」
「なんだよ」
「あんたがモテるのは事実」
「は？」
「あんた、本当に自分のこと分かってない。この前の期末テストは5教科500点満点でいくつだった？」
「……四百八十九でした」
「んで、体育の成績は？」
「……全部Ａです」
「この前のバレンタインデー、チョコは何個もらいましたか？」
「……三十個」
「それを世の中ではモテるっていうの」
「はあ……」
「それなのに、告白されてもフり続けて数年。理由は他に好きな人がいるから。まさかそれが私っていうわけ」
「……はい」
　あー、バカみたく思えてきた。腐れ縁は腐れ縁で、恋愛とかそういうものとは全く違うと思ってきたのに。怒りが、こみ上げてきた。とっさに、オサムの首もとをつかむ。
「あぁ！？なに！？」
「お互いバカだね」
　はじめてだった。あいつもはじめてらしかった。あいつの首に腕を回す。変な息が漏れる。単純にあいつが苦しくなっているだけだった。けど、私の腕の力はなおさら強くなる。どうしようもない。
（バカ、クルシイ）
背中をそっとたたかれた。いよいよ苦しさが限界まで来たらしかった。
　深い呼吸をする。
「人のお願いをきけ！」
「ごめんごめん……」
そのあとは何も言えなくて、結局時間が遅くなったからって言って部屋に戻っていった。
歯磨きとかなんとかを終えて、ベッドにゴロンとする。
――さっきはゴメン
――私もごめん
――俺から話したんだしいいよ
……寝よう。どうせ明日も休みだし、今日明日はだらけていいと思う。
――明日
またあいつ。
――なに？
――予定ある？
――明日はひましてる
――電車乗ってどっかいかん？
――お母さんおるし車乗せてくれるかも
――いや、二人で出かけたい
……まじかあ。
「……どこいく？」
腐れ縁ってのも、こうやって時間が経つと変わるんだなあ。

≪おわりに≫
　小田たつえこと、なんと文学部四年になってしまった者です。この作品は短編かき集めで「ロンドンの呼び声みたいな」というタイトルで掲載予定だった一篇です。ほかの短編が完成していないことと、これだけでも良かろうという意思のもと掲載した次第です。もしかしたら今後、正式に先述のタイトルで掲載するかもしれません。
　卒論ハードモードの専攻に属しているため、今年は寄稿頻度をかなり落とすと思われます。新入生には申し訳ありません。ですが、とりあえず一年以上にわたって不定期連載している作品「無題(仮)」を終わらせることが目標です。それでは。

二〇二一年三月二十九日

新釈・羅生門

目盾　二十一

或日の暮れ方の事である。一人の貧乏学生が、明治大学第一校舎の下で雨やみを待っていた。

巨大な第一校舎の下には、この男の外に誰もいない。この建物が明治大学和泉キャンパスの第一校舎である以上、この学生の外にも、雨やみを待つ不埒なカップルや雨やみを 待つ不埒な男女の二人連れ、さらには雨やみを待つ不埒な男女のアベックなどがいてもよさそうなものである。しかしどうしたことか、この男以外には誰もいない。

何故かと言うと、この二三週間、明治大学には、期末試験とかテストとかレポート提出の締め切りとかいう災が続いて起こった。今も続いている。そこで学生の草臥れ方は一通りではない。ある者はどうにも課題の首が回らなくなり、下宿の窓を打ち破って夜明けの街に咆哮した。ある者は語学の落単必至を悟り、静かな心持で日夜、森見登美彦を読み漁った。生活がそんな有様であるから、誰も休日に大学へと出向いてイチャコラしようなどとは露程思わない。この雨やみを待つ学生もまた、延滞しそうであった本を渋々図書館へと返却しに来ただけであった。

テスト期間中の大学はディストピアと化す。学生の目は普段の輝きを失い、堀は深く、そこには虚無の二文字だけが映る。そして当てもなくキャンパス内を放浪し、似たような境遇の人物を探しては、お互い教授の悪態をつき合い、レポートの無意味さを正当化しようと詭弁を振り回し、無意味に浪費したくせに時間が無いと嘆く。

それは地獄と言っても過言ではなかった。

すると荒れ果てたのをよい事にして、課題やってない詐欺を得意とする詐欺師が現れる。レポートの盗人が現れる。とうとうしまいには、試験に惨殺された引き取り手のない死人を集めて、居酒屋に棄てていくという習慣さえ出来た。

作者は先ほど「貧乏学生雨やみを待っていた」と書いた。しかし、学生は雨が止んでも、格別どうしようという当てはない。なんならリュックサックから折り畳み傘を取り出すこともできる。普段であればとっとと傘を差して帰っているところだが、学生は家に帰りたいと思わなかった。なぜなら家に帰れば、そこには目の背けようもない、ひどく、こう、なんというか、なんとも形容し難い現実――要するに課題の山が彼を待ち受けているからである。だから「学生が雨やみを待っていた」というよりも「雨に降り込められた学生が、これ幸いと現実逃避をして、突っ立っていた」という方が適切である。

しかし彼が家に居ようがいまいが、得体の知れない不吉な塊は彼の心を容赦なく押さえつける。いや、得体は知れている。彼は何を措いても差当り明日締め切りのレポート(手つかず)をどうにかしようとして――いわばどうにもならない事を、どうにかしようとして、とりとめのない考えを頭の中で転がしていた。

雨は第一校舎を包んで、ざあっという音を立てながら地面を打っている。夕闇は次第に足元まで来て、空は数時間前と変わらず、今にも落ちてきそうな重たい雲が覆っている。

どうにもならないことを、どうにかする為には、手段を選んでいる余裕はない。そんなことをしていれば、文学部事務室か、職員室の前で、土下座をするはめになる。そうして、居酒屋へと運び込まれ、同じ境遇の奴と傷を嘗め合いながら、朝日を迎える事になる。

選ばないとすれば――これは彼にとってあくまで仮定の話である。選ばないと「すれば」はあくまで「すれば」

の話であり、「しなければ」で済むのであれば「すれば」を考えないくてもいいのだが、結局のところ彼は「すれば」を考えざるを得ない状況にあり、彼の思考は何度も「しなければ」と「すれば」の間を行ったり来たりして、「すれば」と「しなければ」の境をきめると「すれば」とか、「すれば」と「クレバー」ってちょっと語感が似てるなとか考えたりした。当然「手段を選ばないとすれば」の話は、「レポートの盗用をする外ない」というところへと帰結するわけだが、彼はそのことを積極的に肯定するだけの勇気が出せずにいた。

彼は大きなくしゃみをして、めんどくさそうに傘を差した。雨は冷たく、風も吹いていて、上に一枚羽織ってないと寒いほど、空気は冷え込んでいた。

彼は首を縮めながら正門を抜け、駅へと歩いた。彼は駅前の商店街をぐるりと見回した。雨風の患えのない、課題を思い出す可能性の低い場所で、もう少し現実逃避をしようと思ったからである。すると幸い、マイクを持ったリスの看板が目についた。ここなら歌を歌うことに集中でき、憂鬱な現実を忘却することができるかもしれない。たとえそれが、一時的なものであったとしても。

それから何分か後のことである。カラオケボックスの二階、２０２号室の前で、一人の男が唖然とした表情で立っていた。先ほどの貧乏学生である。彼は、現実逃避をするのは自分だけであると高をくくっていた。それがカルピスソーダを片手に、ふと他人のボックスの中をそれとなく覗いてみると、なんとそこでは彼が良く知っている人物が、気持ちよさそうに天体観測を歌っていた。檜皮色のＴシャツを着た、背の低い、痩せた、猿のような見た目をした幸田という人物である。

幸田は良い噂を聞かない。講義には滅多に参加せず、参加したとしても最前席でポケットモンスターをやっている。そのくせレポートや試験の結果はそれほど悪くなく、成績表もＦの陳列場となることがない。そのことから、幸田が手段を選んでいない人物であろうことは、容易に想像できる。そのいかにも意地汚そうな悪辣な見た目も相まって、幸田に近づこうとするものはあまりいない。

彼は幸田の気持ちよさそうに歌う姿を見て、或る強い感情が湧き上がってくるのを感じた。

奴は俺と同じ講義を受けていたはずだ。それならば、禿頭の馬鹿講師が我々に課した、魔の権化のようなレポートの締め切りが明日に控えている筈だ。それなのに奴はそのことを意に介する様子もなく、気持ちよさそうに天体観測を歌っている。奴がレポートを真面目にやる筈がない。それならば、どうぜまた手段を選んでいないに違いない。

幸田の醜悪な顔から、爽やかな汗が一滴ずつ落ちるに従って、彼の心の中に幸田に対する激しい憎悪が募っていった。――いや、この幸田に対すると言っては、語弊があるかもしれない。寧ろ、ありとあらゆる悪に対する反感が、一秒ごとに強さを増していったのである。

こいつは、こいつらは人のレポートを盗んで平然としている。俺がこれほどレポートに苦しんでいるのに、こいつらは悠然と歌唱を楽しみ、夕食にエビのチリソースを食べ、恋人と不埒なことをしているのだ。これを悪と呼ばずしてなんと呼ぶべきか。しかるべき制裁を加えなければならない。断じてこのような悪を野放しにしてはならない。ぶっ殺してやる。

彼は幸田が歌い終わるのを見届けると、勢いよくドアを開けた。そしてカルピスソーダを片手に、大股で幸田の前に歩み寄った。幸田が驚いたのは言うまでもない。

「な、なんですか、いきなり」

幸田は尋常ではない様子を察知し、飛び上がった。

「おのれ、どこへ行く」

彼は、幸田が机に躓きながら、慌てふためいて逃げようとする行手を塞いでこう罵った。幸田は、それでも彼をつきのけて行こうとする。彼はまたそれを行かすまいとして、押し戻す。二人はボックスの中で、暫く、無言のまま、掴みあった。しかし勝敗は、はじめからわかっている。彼はとうとう、幸田の腕をつかんで、無理にそこへねじ倒した。

「ぼ、ぼくが何をしたっていうんですか」

「うるさい。貴様のような盗人が、楽にレポートを提出するなんてことがあってたまるか」

彼は手にぐっと力を込めた。幸田はうっと呻いて、ただでさえギョロリとした目をさらに大きく見開いた。

「ぼ、ぼくの話も聞いてくださいよ。これじゃあ、あ、あんまりだ」

そう言う幸田の様子はあまりにも情けなく、彼の心の中の激しい憎悪は徐々にしぼんでいった。

「ならば言ってみろ」

解放された幸田はゲホゲホと言いながら、ヨレヨレになった服の皺を伸ばした。そしてジッパー付きのポケットからＵＳＢを取り出した。

「確かに僕は他人のレポートを盗みました」

彼は予想通りの答えに失望した。そして先ほどの憎悪が再燃し始めた。それが幸田にも伝わったのかも知れない。幸田は慌てて後を続けた。

「でも、でも、聞いてくださいよ。このレポートは僕の知り合いのものなんですがね、彼は以前、僕にレポート

の件で泣きついてきたんですよ。そのとき僕は、彼に多少なりともアドバイスをしてやったのに、その恩を仇で返しやがったんです」
「アドバイスといっても、どうせ、どこのサイトから盗用すればいいか、みたいなものだったんだろう」
「そ、それはそうですが、要するに、僕は今回、その知り合いのパソコンからレポートを盗みましたけど、程度の差はあろうとも、似たようなことを皆やってるんです。ウィキペディアやらインチキブロガーみたいなところから、盗用してるんです。でも仕方ないんです。仕方ないんですよ。そうしなければ土下座をしなければならなくなる。居酒屋に犬のように棄てられることになる。手段を選んでいたらこの大学では生きていけない。だから、仕方ないってことをよく知っていた僕の知り合いも、今回、僕がした事を大目に見てくれるに違いありません。そういえば明治大学には三文文士会という総合文芸サークルがあって、そこに所属していれば非常に有意義な学生生活を送れるらしいですよ。有り余る日々のエネルギーを創作活動に充てることができるし、自分の作品が部誌に載るのは気持ちの良いものです。それに夏と冬には合宿もあって、上下の垣根を超えた交流ができるし、毎週金曜日には居酒屋で飲み会もあります(今は無理だけど)。もちろん小説を読むのが好き、という方も大歓迎ですよ。三文文士会は緩いサークルなので、出席のノルマはありませんし、小説を書こうが書かまいが。読もうが読ままいが、そんなことを気にする必要はありません。小説だけではなく詩とか論評とかも取り扱ってますよ。ジャンルレスって感じですね。ちょっとでも文芸に興味ある方は、覗いてみるといいかもしれません。年会費は無料です。実際に所属している人の話によると、所属しているだけで成績はアップするし、異性からのアプローチも多くなって困っているとか。それに美顔効果もあって女性にもお勧めですしなんなら便秘も改善するとかしないとか」
幸田は早口にそうまくし立てた。
彼は冷然として、その話を聞いていた。そしてしばしの沈黙の後に、確認するように言った。
「きっと、そうか」
そうして、一歩前へ踏み出して、不意に幸田の胸倉をつかんで引き寄せると、噛みつくようにこう言った。
「じゃあ、俺がお前のレポートを盗もうが、大目に見てくれるんだろうな。俺もそうしなければ、生きていけない状況なんだ」
彼は、素早く、幸田の手からＵＳＢを奪い取った。それから足にしがみつこうとする幸田を、手荒くソファへと蹴り倒した。急いで一階のフロントに向かい、会計を済ませて外に飛び出した。
しばらく、死んでいたように倒れていた幸田が、ソファからその体を起こしたのは、それから間もなくのことである。幸田はつぶやくような、うめくような声を立てながら、一階へと向かった。そして自動ドアから外の様子を伺った。
そこには、唯、ビードロのように黒々とした夜と、粉々になったＵＳＢが落ちているばかりである。
貧乏学生の行方は、誰も知らない。

心象は我が儘に

狐狸野類

　その臓器は私の意志に従ったり従わなかったりした。止まってくれと言えば止まらず、動いていてと願えば、今のところは止まっていない。そんな自由奔放な体の一部を、私はどうしても私とは思えず、また他人とも思えないのだ。胸に手を当てると、いつも決まって心臓の音は聞こえた。生まれてこの方例外は一つだってない。だから、私はずっと孤独ではないのだ。友達の少ないことでの苦労は少なくない人生ではあったが、孤独に負けたことだけは一度だってなかった。自殺が死因のトップを悪趣味にも飾る我ら世代ではるけれど、そういう人たちは心臓と良いご縁がなかったんだろうくらいに思っている。ないない、と続いたのでここらで一つあるあるを挟もうか。激しい運動をすると心臓も一緒に高鳴って共感の意を示してくれるので嬉しい。あるある～。

　例によって共感されたことはない。

　さて、時は浅夜。所はマイルーム。私は今、ひどく切ない気持ちである。出てくる唾液が全て胃液に代わってしまったときを想像してほしい。いや、そんな状況はあり得ないのかも知れないけれど、とにかく酸っぱくて焼けるようなのだ。吐き出さずにはいられない。私は布団に潜り、暗がりのなか己の胸に手を当てた。力強い拍動に身を寄せる。こぶし大の友達へ。

「ねぇねぇ、ゾウ君。私は切ない。丸々と太ったイチゴが存外甘くなかったときのように…」

「どうしたの、ココロちゃん。そんな辛気臭い顔して」

　やけにリズミカルな方が心臓だ。親切に言うなら後者である。私は彼の顔を見たことがないけれど、優しくて女々しくて理性的なので私によく似ているのだと思う。

「わかる？　この辛気臭さが。実は、話したいことがあるの。聞いてくれる？」

「もちろん。こういうとき一人で塞ぎ込むのは何よりの悪手だ。僕はむしろ、頼んで君の聞き手となろう」

「流石、心の友よ」

「「あっはっは」」

私は少しだけ部屋のドアに気を配ってエッヘンと咳払いをすると、次のように続けた。

　そう、あれは六限目、教師たちに良いように使われている総合の時間のことである。私はただ、ポカポカさせてくる斜陽の下、マイ腕枕を堪能していた。美鈴せんせの言の凶刃がもうそこまで迫っているとも知らずに。

「やい、心。あなた、今の今まで寝てたわね」

むくりと体を起こす。袖でまぶたを擦りながら言った。

「ごめんなさい美鈴せんせ。おはようございます、美鈴せんせ。そう、今の今まで寝てました。授業が始まったなら叩き起こしてくだされば良かったのに」

　大きなため息が最後尾のこっちまで聞こえてくる。

「こんにちは、ね。あなたは知らないでしょうけど、先生は今までとても大切なお話をしていたのよ？」

　やはり、美鈴せんせは優しい。彼女は怒る前に自己を顧みる先生だ。その優しさに免じて、だから寝るのだとは言わないでおく。

「あなた、将来の夢は？」

　ふふん。なるほど、この授業の全容を掴んだ。こういうときのために考えておいたとっておきを出すか。私は極めて真面目ではきはきしていた。

「不老不死です。」

教室の隅々が沸く。せんせも例外に漏れない。

「確かにあなたは不老不死って感じよね。でも、そうじゃなくて。職業で言うと？」

察していなかった訳ではないけれど、満を持してのつまらぬ返しである。だから私も、同じく満を持して、恐らくつまらぬこの言葉を贈ろう。
「ないです。」

「……というわけだよ、ゾウ君」
私は当時の感情が風化してしまわぬよう細心の注意を払いながらゆったりと語り終えた。
「トクントクン、なるほど」
話途中、常にトクントクンと、相槌を打っていたゾウ君である。よく聞いてくれていたには違いない。
「して、ココロちゃん。君は何が言いたいの？　昼寝を邪魔されたことへの恨み言ってわけじゃなさそうだけど」
そりゃそうだ。その気があれば本人に言っている。要件は『大切なお話』の方にあった。
「うん、あのね、私が納得いかないのは将来の夢についてのくだりだよ」
「不老不死。どうやら君の答えは先生の求めたものとは違ったようだね」
「そう！　そこなのだよ。私は恭しく、至極真っ当に応えたつもりだった。だのに言ってみればどうだ。そうじゃない？　そりゃあ私だって察する部分はあったけれど、死にたくない老けたくないと言っただけではないか。それを否定するとは何事か！不遜にも程がある」
「まぁまぁ、落ち着いて。顔が赤いよ。度を超えて酒の入った大人みたいだ」
それは酷い顔だ。自分が道端に吐いた胃の内容物の後始末さえできなさそう。私は大きく息を吸い、言葉と一緒に吐き出す。
「ごめん、口を悪くした……」

「いいんだ。僕も一理ある。共感どころか共鳴するよ。トクントクン。君は正直に答えただけだもの。それにしても、やはり学校で言う将来の夢とは、なりたい職業のことなのだね」
「そうだよ」
実際そうだ。今よりはまろやかだったかもしれないけれど、小学校のときからそれらには具体性が求められてきた。
「ちなみに、他のクラスメイトは何て言ってたの？」
先述した話の後、私はふてくされながらも、授業自体は聞いていたのだ。いくつか覚えがある。
「うーん、そこまで多くの人がちゃんと決まっていたようではなかったけれど、公務員、建築系とか、外国行くって人もいた。あと、ユーツーバーもいたで。ユーツーバー」
「そう、足りないなぁ」
「何かがあって当然みたいな言い方だね」
「目的だよ。その職業になる目的。なりたいって言っても肩書だけあって満足するわけじゃないでしょ」
「言わなかっただけじゃあないの？」
「でも先生はそれで満足しちゃったんだ」
私は考える。確かに我ら学徒の将来の生活を危ぶむのなら、働き口は無くてはならないだろう。
けれど、
「将来の夢に具体的な職業を挙げることほど夢のないこともないだろうに」
ゾウ君は、物憂げにつぶやいた。
「然り。然りだよ！　順序が入れ替わっているじゃあないか。職業なんてのは己のしたいことを叶える手段に過ぎないはずだ。金持ちになりたいのはその金で買えるものに夢を見るからだ。ある職業になりたいと思うのだって、その職業だからできることに憧れるからに過ぎない！」
「うんうん。少なくとも日本の教育にそういった要旨のすり替えがあることは否定できぬであろう。将来の夢はただのいつかやってみたいこと、くらいで良いはずなんだ。勤労なんてしたくない人がほとんどだろう。でもしなきゃ生きていけない。だから、大人が勝手に気を使って夢なんて飾ってみせたんじゃないかな。子供たちは今迷っている。自分のしたいことと、そのためのこと、曖昧になった境界によって」
「私、明日この気付きを先生に言ってみるよ……。夢とは、……!?」
そのとき、私に電撃が走るのを聞いた。背筋が引きつり、しばらく動けなくなる。呼吸を思いだすと、過呼吸になるほど横隔膜を働かせた。
「大丈夫か！　ココロちゃん！」
「私は、最初に、切ないのだと、言ったな……」
ぜぇぜぇ、詰まりながらもひねり出す。
「その感情の出どころに気付いてしまったよ…。最初は自分がいじけてるだけだと思っていたけれど」
不老不死。それは私が心から願うことだった。
「私欲張りだから、やりたいことといっぱいあるんだ。世界中のおいしいものを食べ尽くしたいし、地位も名誉も金もほしい。しかし、それにはどうしても時間的制約が邪魔なのだ。だから私は不老不死になる必要があった。Are you ok?　ゾウ君」
「いえっさあ…」
「私、漠然と死なない気がしてたし、今んとこ老けてないし生きてるしで不老不死だわぁ、って思ってたの…。

でも、夢って現実の対義語じゃないか。現実とは一番程遠い。それを知っていながら私は夢として不老不死を掲げたのだ。他ならぬ私がッ、そう自覚していたのだ。だから…わた、私は不老不死ではないのでは…」
「待て！　でも夢は決して叶わないものじゃない。それはわかっているだろう⁉」
ゾウ君はいつもの規則正しいリズムをとち狂わせて叫んだ。
「けれど、その可能性を考えてしまった今、私は不安でたまらない…。だって、人類未曾有の境地だぞ…」
彼は一層調子を強める。
「生きることを諦めるな。その夢は、僕のものでもあるのだ」
全身を揺らすほどに胸が打たれる。
「私、死にたくない…。ゾウ君、これからも、ずっと動いていてくれる？」

　しばらくして、彼女は眠りについた。頬に伝った涙を徐々に乾かしながら。時は深夜、心臓は絶えず鳴動している。彼女の見る夢とは無関係に。

水面

私の一番うつくしい色は赤だ。例えば熟れた蛇苺の赤、あんなに口に入れたくてたまらなくなるのに肩透かしを食らうような味がする。ポインセチアの赤、椿なんかより少し乾いた花弁ををしている。ルビーの赤、ずっと見てたらわるいものに魅入られてしまいそうですぐに目をそらしてしまう。お隣のお姉さんの口紅の赤、お母さんは「派手すぎる」「はしたない」というけれど誰の目にもとまらない地味なコーラルピンクなんかより全然いい。それに生き物の身体の赤、生肉とか理科の教科書に載ってる人の内臓とかを見るとこんなものが自分の身体の中にもあるんだとどきどきするし、こんなに赤い液体がきちんと私の中でも泳いでるんだと思うと自分のからだが愛おしくなる。

そして、私を一番うつくしくない色は赤だ。髪の毛は一見すると黒だが、陽の光に照らされると重たい茶色になる。黄味が強い肌に、瞳に光が入るのを邪魔する下向きに生えた睫毛。いつも影の中を歩いてるみたいな顔をしている、と言われたことがある。鮮やかな赤が私の腕の中に飛び込んだ途端にくすみ始めて、その呼吸も瑞々しさも何もかも失われるのだ。しかし、私の部屋には可哀そうなことに、こんな舞台にやってきてしまった赤の残骸たちがいる。彩度を抑えた朱色のハイネックのセーター、冬に映えるだろうと思って奮発して買ったワインレッドのマフラー、昔昔にお菓子のおまけでついてきた「ルビー」の指輪、似合わないと分かっていたけどどうしても唇に乗せてみたかった真紅のリップ。みんなみんな私なんかのところに来ちゃったから死んでしまった。

だからもう赤を連れてこない、そう思ってたんだけれど今日塾の帰りにふと立ち寄ったドラッグストアのネイルコーナーで足を止めてしまった。「シグナルレッド」という色が目に飛び込んだ。鮮やかな、でも柔らかさもある赤。少し派手すぎるけど、足の爪に塗るならいいかもしれない。もうサンダルを履くには風が冷たいけれど、私はどうしようもなくその赤が欲しくなって、色の付いていないリップクリームとともにレジへ持っていった。

*

朝起きて合服を着るか冬服を着るか迷うようになった。夏用のスカートの薄さは心もとないけれど、冬用の重みは少し鬱陶しいなと思うくらいで、季節が変わった実感もなかった。通学路にある緑色の屋根の家は人が住んでいるのだろうかというほどにひっそりとしているが、低めの塀から覗く手入れの行き届いた庭が住人の存在を感じさせる。少し前まで盛りだったケイトウが茶色っぽくなっている。次は何の花が咲くのだろう、とぼーっと立ち止まってしまっていることに気づいて、再び学校に向かって歩き出す。

服装検査がある日の朝は風紀委員は十五分早く登校しなければならない。といっても私はいつもその三十分前には学校にいるので、今朝も特に急がなければならないということはないのだが。

いつもより五分早く着いた教室は、いつも通り人が少なく静かだった。騒がしくなるのは登校時間の十五分前ごろからだろう。今のうちに、と思い廊下の棚に置かれた花瓶の水を替えるために席を立った。ピンク色のコスモス、白々しいうす紅色をしているから私はあまり好きじゃない。水を替えるついでに少し茎も切っておこう。切り花を長持ちさせるためには水を替える時に少し茎を切ってやるといい。ゴミ箱の上でぱちん、と刃が合わさ

る音がして、一センチほどの黄緑色が落ちる。切り花の断面を見ると私はどうしても痛々しく感じてしまうが、それで花たちはどう思うのだろうか。永くうつくしくあるための代償だとでもいうのだろうか。湿り気のある花弁は私に呼吸を思い出させた。

＊

「えっ、今日服装検査だっけ？」
教室の方から賑やかな声が聞こえてくる。
「朱理、忘れてたの？　相変わらずだね～」
一人の少女を囲む複数のこれまた少女たちが呆れながらも楽しそうに笑った。朱理、と呼ばれた少女はクラスメイトで、テニス部に入っているがあまり練習にはいっていないらしい。最もうちの学校のテニス部は強豪というわけでもなく、顧問の先生も厳しくないので幽霊部員がそこそこいるのだ。
「うわ最悪だ～。分かってたら朝メイクしなかったのに。あたし、アイブロウ見つかんなくてバス一本逃したんだよ～？」
あんたが毎回忘れてるからでしょ～、と周りに笑われながら、彼女はカバンの中をごそごそとかき回して、クレンジングシートを探している。校則を律儀に守ってメイクをしてこない生徒が多いうちの学校で、彼女たちのグループは少し派手で目立っていた。色付きのリップバームすら禁止というのは少し古臭いように思えるが、それを変えたいと思っている生徒もあまりいないからずっとそのまま。進学校とまでは呼べないがスポーツが強いわけでも卒業後の就職率が高いわけでもない中途半端な偏差値の高校と、そこに集まるそこそこまじめで目立つのが好きじゃない生徒。周りがすっぴんならそのほうが楽だしそれでいいやというのが多数派の意見だ。
「ちょっと落としてくる～」
彼女、朱理、いや高浜さんはそういって教室を出ていった。ああメイク落としちゃうのか、もったいない。もったいない、そう思った。生活指導の藤原先生が見たら一発で指導をくらうであろう赤みがかかったリップは彼女によく似合っていたから。朱理という名前と同じくらいに。それと同時に見てみたいと思った、素敵なものが台無しになるところを。折角作った砂のお城を壊すみたいに、ジェンガをつついて倒すみたいに、人がその人自身にふさわしいものをわざわざ手放すところを。何気なく席を立って教室を後にする。朝練の終わりの挨拶がグラウンドの遠くから聞こえて、教室に人が集まり始める。今年の初めに改修工事が終わって綺麗になったトイレのドアを開けると、始業前なので数人の女子が並んで待っていた。私は列に並びつつ、メイクを落とす高浜さんをこっそりと鏡越しに見ていた。目元をごしごしと擦る。うっすらと血管が透ける瞼の薄い皮膚が擦られたほんのりと赤みを持つ。少しだけ跳ね上げたアイラインが落ちると目元が柔らかくなった。上から順に降りていって頬を擦る。わざわざしてきたメイクを落とすことになった落胆からか若干手つきが荒い。擦られた頬はまた少し赤くなって、ファンデーションで隠していたであろうそばかすが少しだけあるのが分かる。次にリップ。なぜか心臓の近くがざわざわする。失ってほしいし、輝いててほしい。赤みの強いピンク色のリップが載せられた唇も擦られていく。シートで拭いた後の少し湿った唇は、リップを付けていなくても血色がよいピンク色をしていた。鏡から目を逸らす。

なんだろう、彼女は台無しにならない。彼女は手に入れてもそれを殺さないし、手放しても影を落とさない。なぜだろう。私と何が違うんだろう。私とは全部違う。
列はいつの間にかなくなって自分の番が回ってきたけど、私はそのまま女子トイレから立ち去った。

＊

ずっと考えていた。今日一日考えていた。古典の時間も生物基礎の時間も世界史の時間も。私もそれと一緒に学校にいってみたいと。でも彼女のようにはできないと。
明日の英語の予習もあまり手につかず、勉強机に向かってはいるがノートと教科書を開いたままぼーっとしている。誰にも見えないように、誰にも気づかれないように、それと一緒に学校に行く。でも、私は高浜さんじゃないから。
はっ、と思い出す。そういえば、とこの前塾の帰りに寄ったドラッグストアの紙袋を手に取る。あった、シグナルレッドのマニキュア。足の爪なら靴下も靴も履いているから誰も分からない。やりかけの予習はとりあえず置いておいて、私は初めてそのネイルのふたを開けた。椅子の上に片膝を立てて座り、はみ出さないように慎重に塗っていく。左足は小指から、右足は親指から。普段ペディキュアを塗ることはほとんどないから、何度か失敗したが無事塗り終えて、乾く前にどこかについてしまわないよう慎重に足を降ろす。乾かしながら放り出していた予習を再び始めると、終わるころにはもう0時を回ろうとしていた。早く寝ないととまずいな、と思いながらも、そんなにいやな気持じゃなかった。興奮して値付けないことを心配したが、気づいたら眠っていて遠足の

前の日の子供みたいな夢を見た。

＊

この日は生まれて初めて、朝起きてからパジャマを脱ぐよりも先に靴下を履いた。家族にも秘密だったからだ。今日、私の爪は赤い。変わり映えしない通学路も、いつもと違って見えた。空気は少し済んでいる気がした、鳥はいつもより朗らかにさえずっている気がした。耳元で世界は素晴らしいんだぞ、と喚かれているような気分だったが、不思議とそれも不快じゃなかった。いつもは意識しない靴音が世界中に響いている気がした。

まだ人が少なく静かな校門をくぐると抑えきれない程の高揚感が胸の中で育つのを感じた。こめかみがじんじんと熱くなる。教室に着いたのはいつも通り少し早めで、本でも読みながら始業時間を待とうかと思ったが、文字列の上を目が滑って内容が頭に入ってこない。私の席の横を人が通るたびにびくりと背筋を伸ばす。教室に人が入ってくるたび胸がどきどきする。時計の針を何度も確認してはつま先を軽く床に当てて音を鳴らしてみる。学校指定の白い靴下、黒のローファー、その下。その下の爪はシグナルレッドに塗られていて。塗られていても私は何食わぬ顔をして座っている。ページが進まない本を手で弄びながらこの高まりをひた隠しにしている。シグナルレッドは緊張と興奮をパレットの上で混ぜたような色だとこの時思った。いつもより時間が経つのが遅いように感じる。昨日済ませたので今日は必要ないのだが、花瓶の水でも入れ替えようかと廊下へ向かう。

すると、いつもはもっと遅くに来るはずの彼女が廊下の向こう側から歩いてくるではないか。私は思わず叫びたいのをこらえて、水を替えようとするふりをして花瓶に手を伸ばした。私の手の熱で花瓶の水が沸騰するかもしれないと思った。高浜さんとは同じクラスで話したこともないけれど、今日なら言える気がした。朱理って名前ずっと素敵だと思ってたって。花瓶を持った私のすぐ後ろを彼女が通り過ぎ、教室のドアに手をかける。今日の私は爪が赤いから。だから。

「高浜さん！　あの」

突然呼び止められた彼女がぱっとこちらを振り返る。大して話したこともない地味なクラスメイトに声をかけられて少し不思議そうな顔をしていた。誰にも見えない足の先にぐっと力が入るのが分かる。

「あの、私ね、前から」

と口ごもった時。

「朱理！　今日は早いじゃん、珍しい」

高浜さんを朱理、と呼ぶ友人たちが彼女を見つけて声をかける。投げかける相手がいなくなった言葉が、私の足元、廊下の冷たい床に落ちて転がっている。数人の女子の群れは笑いあいながら教室へと入っていった。さっきまでぐつぐつと煮立っていたコスモスの水は、今はしんと常温になっていた。

帰りに除光液を買って帰ろうと思った。

希望

葉桜照月

ここが未開の広野だったならば、私は人類史に残る大探検に挑んだ者として数多の少年少女の憧憬の的になると思うのだが、残念ながらそうではない。ここはもう千年は前に探検隊が開拓しているし、住人もいる。何より私を憧れの的とする少年少女などいない。

私が夢と闘志に燃える熱い人間だったならば、この任務を目を輝かせながら遂行させたかもしれないが、残念ながらそうではない。そこまで楽天的にはなれない。この仕事はいつだって陰鬱で、欺瞞に満ち、虚飾に彩られている。

道端にいつのものとも知れない人骨が増えてきたら、目的地の近づいた証拠だ。おそらくはかつての住民。この世界にはもう火葬する燃料も土葬する労力も残っていない。死者は捨てられる。そして土へと還りゆく。

まだ極北ではないから雪は疎らに積もるのみで、野営もまだ簡単だ。だがこれからの旅路でいつかは氷に閉ざされた極北の北の果ての集落に行くことにはなる。万年雪の雪原で一人野営をするのは、正直翌朝に冷たくなっているリスクを伴うから怖い。今は凍死の危険はないが、野盗の危険はある。もっとも、野盗なんて野蛮かつエネルギッシュな行為なんてできないほどにこの世界の人間は疲弊しているし、万が一遭遇しても撃退できる戦力はある。恐れるべきは、かつて仕掛けられた狩猟用や侵入者対策用の罠と、なによりもこれから向かう集落の人々が排他的になっていることだ。

結論から言うと、どちらも心配はいらなかった。罠の跡はあったが作動したまま放置されていた。極めて原始的な落とし穴式の罠で、荒いしそこまで深くもない。人間だったら容易に脱出できそうだった。二つ目、住民感情の懸念もまた、簡単に杞憂だと分かった。この住民たちにとうに感情はない。早い話が、全滅していた。かけた皿を大事そうに抱えた子どもらしき人骨達や、かつては畑であっただろうただの荒地に打ち捨てられた骨に残った歯形が、この集落の崩壊の過程を偲ばせる。

村の中心部は少しだけ小高くなっていて、ひとまわり大きな廃墟があった。多分ここがこの集落の長の家だったのだろう。石造りの土台の上にほんのわずかな構造物があるばかり。他の家よりも荒れ方がひどく、土台の石は火に焼かれた跡と思しきひびがある。廃墟に向けて統制教会の正規の挨拶儀礼を行った後、何度言ったかはもう覚えていない、お決まりの台詞を言う。とうに見る人もいなくなったこの集落でそんなことをする意味も価値も利益もないが、正規の方法に則ることは義務である。

「私は『統制教会』二等遊師、エレウテリア。統制教会告示第零号に基づき、この集落の皆様に伝達します。…先の大災害により麻痺した各インフラ網について、約十インドクトほどの時間はかかるものの、再構築が見込まれており、既に復旧作業が始まっています。ですが、中央都市の被害は甚大で、中央集権統治機構の再建を断念することになり、統制教会は少なくとも向こう五インドクトのあいだ、全地方都市群落に対して自治権を付与することを決定しました。私は今日一日の間、こちらに留まりますので、質問事項のある方はおたずねください」

無人の廃集落に抑揚なき声が響く。この響きは空気を震わせこそすれ、私以外の鼓膜が震えることはない。

＊

希望を込めた優しい嘘。
裏返せば、真実は絶望にまみれた、残酷なものということになる。

あの日。全世界を壊滅的な大災害が襲った。隕石衝突か、神の怒りか、今となっては分からないが、どちらにせよ、世界文明は滅んだということだけは確かだった。すべてのインフラは麻痺したが、治安は悪くならなかった。対立を起こすほど人が残らなかったからだ。中央都市の人口は後に知ったところだと九割五分を失ったらしい。

その後、残された人々は、あの大災害で死んだ方がいくらかましだっただろうというほどに苦境にあった。道には秋の落ち葉と遜色ない量の死骸と、そこから湧き出る腐臭、蠅に蛆。愛した人を見つけて泣く声があった。狂気に染まって叫ぶ声があった。状況を飲み込めずに惑う子供の声があった。

だがそれは最初のひと月だけに過ぎなかった。私達は理解したのだ。枯れるほど泣いても無駄だと。かすれるまで叫んでも無駄だと。目の前の出来事を理解しようとしたところで、キャパオーバーもいいところなのだと。

人々はみな精神を病んだ。眼を閉じ、耳を塞ぎ、呻く以外に声も出さず、ただ死を待つ。これはただの悪い夢なのだとただ言い聞かせた。覚めない夢を少しでも早く終わらせるために、手首を切り、喉を突き、頭を撃つ。人々はみな、精神を病んだ。

そういう意味では、私はいくらか幸福であったのかもしれない。親はしばしば家を空けていたし、中等教育終了後は統制教会図書館に籠りきりだったから、失ってショックを受ける誰かが私にはいなかった。もちろん司書さんの亡骸を見たときはひどく動揺したが、愛する人や昨日別れたばかりの友人は私にはいなかった。それだけの話だ。キャパオーバーなのは他の人と全く変わらないが、精神を病んでしまうほどには、摩耗されていなかったのだ。

そういった人間が他にいなかったわけではなかった。中央都市の再興を目指す人々もいた。彼らは彼らなりに、馴れ馴れしく寄り添ってくる絶望を何とか振り払いながら生きていた。その中心にいたのが、統制教会本部長、つまり導師さま、統制教会の実質的な統治者だった。

導師さまは、間違いなく最も深い絶望を味わったお方だったと思う。祈禱師たる導師さまは、神の御言葉に従えば世界が良くなるという信念のもと活動しておられた。その神が無警告に、無差別に、無慈悲に、文明を滅ぼしたのだ。自身の半生を捧げた神は、この危機を看過している。放置している。黙認している。自分に何の失態があったのか、常に自問なさっていた。通常であれば信仰心すら失ってしまいそうな世紀末の世界にあって、導師さまは再び立ち上がった。まずは人々に光を取り戻すために、中央都市を一から作り直す。そう決心なさったのだ。

ある日、導師さまは私を呼ばれた。大災害の前、一度だけ導師さまとお話したことがある。統制教会図書室に毎日籠っていたら、そこな少女よ、と話しかけられた。書物を読むのはよいことであるから。これからも励みなさい。それだけ言って去っていった紳士がかの導師さまであると知ったのは、司書さんに教えて貰って初めて知った。

導師さまはこんなことを仰った。

「少女よ。卿の向学心は大災害以前の統制教会中央都市本部内で知らぬ者はいなかった。汗牛充棟であったあの図書館もその悉くが灰燼と化したが、卿の知識に少しでも蓄積したものがあれば、烏有に帰した書物たちも無駄ではなかったと言えよう。……これから中央都市は再起動を始める。だが卿のような博覧強記は、当面は力仕事を求められる再起動において持て余すことになる。よって、卿には別の任務を与える。統制教会新改訂玉条に拠る統制教会本部長の権限に基づき、卿を統制教会の一員と認め、二等遊師の地位と、エレウテリアというコードネームを授ける。遊師の使命は分かっておろう。本来は諸地方を渡り歩き教えを説き、各地域の文化習俗を記録することだ。……だが今回卿にしてほしいことは違う。伝達者、つまり地方都市群落に中央都市の再興を知らしめてもらいたい。まだ中央都市の再起を知らぬ民が地方にはいる。彼らに希望を与えるのだ。頼んだぞ」

＊

エレウテリア。希国の言葉で自由を意味する言葉らしい。私の役目は自由を告げる者だから、なのだろう。中央都市に権力や商工業のハブを置き、地方都市をスポークとする体制は、大災害によって中央都市が陥落したことによって完全に裏目に出た。地方都市同士の連携の弱さと、地方都市の自立力の不足によって、中央都市からの連絡が途絶えた地方都市の人々は途方に暮れる。その困難からの解放者、自由と希望を告げる者。それが私。

あの任務を貰ってもう六年目になる。あれ以来中央都市には戻らず、地方を歩き続けている。荒れた野原を歩き、暗くなったからこそよく見える星空を眺め野営する生活は、なんだかんだで楽しい。中央都市の残骸に囲まれているよりはずっと良かっただろう。他の人よりも精神が摩耗していなかったということは、私だけがただまともだったということだ。そんな中央都市にいたままなのは正直うんざりしていた。あの任務を貰って嬉しかったのだ。

だが、この任務には嫌気の差すところがたくさんある。例えばまず一つ目は、自立力のない地方都市に自立しろということの残酷さ。中央都市が強力なハブとして自立力を奪ってきたのに。

二つ目は、『中央都市はもうすぐ復活します』という偽りの希望を吹き込むことだ。希望を込めた優しい嘘。裏返せば、真実は絶望にまみれた、残酷なものということになる。中央都市を一度見れば、再起動など到底不可能であることを誰もが察するはずだ。中央都市再起動を目指していた人たちの誰も、多分導師さまですら、本気でそれが叶うとは考えていないだろう。あの人たちはあくまで、絶望的な真実に対面したくない一心で再起動なんていう大言壮語を吐いているに過ぎない。真実に適応できずに狂って死ぬか、狂ってないと狂信して目をそらし続けるかの違いだ。

そして三つ目、何よりも大きいのが、大災害で壊滅的被害を被ったのは、中央都市だけではないという事実を突きつけられる、ということだ。事実として、ここまでに六年かけて百近い地方都市を訪ねてきたが、この町のように全滅した村がちょうど七十、痕跡がわずかに残るだけだった街が十四、忽然としてとうとう見つからなかった街も一つや二つではない。生きた人間の一人でも残っている街は片手で足りる。まともな意思疎通のできる人間が残っていたのは、ゼロだ。

夜が近づいて寒くなる。毎晩の様に聞く焚き火の音にもいい加減飽きるという感情を抱くことすら億劫になってきた。建材だったであろう木がそこらにごろごろあるからくべる木には困らないが、乾いていないのが多くて困る。辛うじて屋根の残っている廃墟に行くしかなかった。

大きな家族の家だったのだろうか、ベッドが多い。いくつかのベッドは骸骨を寝かせている。期待はしていなかったが、やはり食料や飲料の類はない。

机の上にはコンロがある。ガスは少しだけ残っているようで役に立ちそうだから持って行くことにするが、当然コンロ自体には何も乗っていない。その脇には古びたアルバムが置いてあった。『誰か持って行ってください』とある。その中身は、いつかの住民たちの写真たちだった。村の祭だろうか、キャンプファイヤーを囲んで踊っていると思われる写真や、農業に勤しむ姿、食卓を囲む家族の姿。ほとんど笑っている写真ばかりだ。写っている家族はひとつだけではないから、たぶん村共有のカメラだったのだろう。どうやら大災害の跡の写真は一枚もない。たった一枚、おそらく中央都市の方角の空に真っ赤な火柱が昇っているのがある。これが最後の写真のようだ。このアルバムは、この町が確かに存在した最後の証拠。もうこのアルバムを見た私以外に、この町の在りし日の姿を知っているのはいない。そう考えると少しナーバスになる。

ふと、床に蓋があるのに気付いた。地下室か、倉庫だろう。やたら厳重に封印されているのが気になって、無理矢理開けてみる。やはり地下室のようで、階段が続いている。

マントルランタンを提げながら階段を恐る恐る降りていくと、そこには四方を四角い石で囲まれた広くない空間があって、奥の壁に何かが寄りかかっている。また骸骨かと思ったが、機械だった。人の形をしている。足の片方が破損していて、自立はできなさそうだ。

機械が音を立てる。起動した。私が来たことに反応したのだろうか。機械はどこからか、男性に寄せた機械音声でこう言った。

《私は第五世代人格搭載ロボット、F—580。異郷の使者よ、あなたを歓迎します》

ロボット。図書館で記述を見たことがある。確か数百年前、技術の絶頂として作られた人造生命。高価だったが、かつてはほとんどの地方都市にまで一台は普及し、人間のよき友であったという。だが何らかの理由でその製造と利用は禁止され、いつしか存在ごと忘れられていった存在。初めて見た。

読んだときは少し興味を持ったものだが、実物を見るとがっかりする。数百年放置されていたとはいえ、見た目があまりにみすぼらしい。人間を模した金属の手足と胴体があるだけ。それもいたるところにパイプやコードが通っていて、肌なんてものはない。金属の表面は錆が深刻で触りたくもない。触ったところで何の温かみも感じることはないだろう。所詮、作られた生命。応対も機械的だ。プログラムに則ったただ喋るだけの機械と何が違うのか、見分けがつかない。

だが、この任務に出て早六年。ほぼ初めて意思疎通をする。声は出せるし、問題はないはずだが、いかんせん六年ぶりの会話だ。変な緊張を覚える。落ち着け、相手はたかが機械。まずは挨拶を返すのだ。

「私は統制教会二等遊師、エレウテリア。ある任務で中央都市から来ています」

《エレウテリア遊師。ロボットというものを知っていますか》

「多少は。禁止されているはずの古代技術ですね」

知っていてよかった。知らなかったら機会に講釈を垂れられるところだった。

《でしたら話が早い。私はその禁止令の出る前に製造された量産型のロボット。製品としては『ネイバー』と呼ばれていましたが、禁止令が出されました。この町の人々は私の破壊を躊躇い、地下室に封印しました。禁止令が比較的早期に解除されると見たのでしょう》

「だけど、そうはならなかった」

《はい。封印されてから二百年強が経ちました。エレウテリア遊師がいらしたのは、その禁止令に関することですか》

「いいえ。七年前、大災害が発生したことで中央都市はじめ諸都市に壊滅的な被害が出てしまい、その被害状況の伝達の任務にあります」

《そうでしたか。お疲れ様です》

「機械に感謝されても」

《……あなたは私を機械として見てくれるのですね》

「あたりまえでしょう。あなたは人間ではないわ」

言葉にちょっと苛立ちが出てしまい、丁寧語が崩れる。やっぱり人と喋らないと、情緒が乱れる。だがそれをお構いなしに機械は続ける。

《正直その扱いをされて私は嬉しいのです。かつてロボットが禁止されたのは、ロボットと人間の境界線が曖昧になりかねなかったからです。私は町の人々に隣人として扱われ、私も彼らを愛していました》

「機械に感情なんてない。あなたのそれは美化か幻想よ」

《……そうかもしれません。でも私は地上が気がかりなのです。数百年経ち、私のことを知るものは誰もいないでしょう。ですが。エレウテリア遊師、お聞きしたいことがあります》

やはり村にはもう誰も生き残っていないことは知らないようだ。知らせる義務もない。思い出に浸らせておけば、暴走することもないだろう。

「何かしら」

《災害があったと聞きましたが、あなたはその被害の報告をこの町にしに来たのですね》

「その通りよ」

《つまりこの町は、まだ人が生きている。笑顔があるということなんですね》

「――――ッ」

《回答が確認できませんでした》

「……」

《回答が確認できませんでした》

「 」

《回答が確認できませんでした》

「……災害の被害は酷いから、みんな顔は暗い、かな」

嘘。嘘。優しい嘘。嘘は希望だ。現実を知れば絶望する。悲しむ。……悲しむ？　機械が？

《……そうでしたか。でも大丈夫でしょう。生きている限りは、顔を上げ、前を向く力が誰にでも備わっています》

この機械はなんて優しいのだろう。機械に見られるのが嫌で俯いた。

「……うん」

そうとしか言えなくて。

「きっとそうだね」

私は今日も、嘘を吐く。

あれ、私は何に嘘をついているのだろう。

＊

生木がわずかに残っていてやはり煙い焚き火に、手を近づける。星空は曇って見えない。

アルバムは置いてきた。あれを形見として持ち帰る信念があったなら、私のバッグはとうにそんな形見で溢れかえっている。

あの機械――――いやロボットの一件から、私は自分のことを見返り続けている。

私は何のために嘘を吐くのだろう？　人間は停滞から脱するのに希望が必要だ。絶望を振り払わなければいけない。それが偽りの希望であろうと、本物の絶望よりはずっとましだ。だから嘘を吐く。希望を吹き込むもの。

絶望から解放するもの。それがエレウテリアという言葉に込められた意味だ。
少なくとも私はそういう風に正当化して来たが、しかし、さっき私は機械にまで平然と嘘を吐いた。絶望しない者に。希望する必要のない者に。人間に嘘をつき続けて、人間以外に嘘を吐くことを厭わなくなってきた。

……いや、いや。本当にそうだろうか？
全滅した村がちょうど七十。痕跡がわずかに残るだけだった街が十四。忽然としてとうとう見つからなかった街も一つや二つではない。生きた人間の一人でも残っている街は片手で足りる。まともな意思疎通のできる人間が残っていたのは、ゼロだ。
……私は最初から、人間相手に嘘を吐いたことなんて、一度もないじゃないか。いるとしたら、一人だけ。

そもそもこの先の旅路、いやすべての地方に、人間は残っているのだろうか？
希望を込めた優しい嘘。
裏返せば、真実は絶望にまみれた、残酷なものということになる。

『まだ中央都市の崩壊を知らぬ民が地方にはいる。彼らに希望を与えるのだ。頼んだぞ』

任務を貫った私は。コードネーム（エレウテリア）を貫った私は。
嗚呼、希望に満ちていた。

からり、とカクテルグラスの中で氷が崩れた。
幸せそうな空気を漂わせていたカップルが、ドアの向こうに消える。一瞬だけ顔を出す暗い外界は、降りしきる雨でけぶっていた。
セブンスターに火を点ける。肺一杯に紫煙を吸い込み、灰皿に灰を落とす。
ウチ、どこで間違えたんかなぁ……。
ニコチンに視界がパチパチと爆ぜ、ギムレットを飲み干し、じっとりと瞼を降ろす。
尿意を覚え、トイレを探す。カウンターしかない店の奥に看板が見えた。
席を立つ。私しかおらん店内に、こつこつと足音が響く。
ドアを開け、閉める。下を脱ぐ。機械仕掛けの水洗音が出迎えてくれた。
腰を下ろし、はぁと息をついた。
太ももに肘をつき、目線を下にやる。アイツの好みに合わせた色の下着が目に入った。
「……帰ろ」
思わず独り言つ。帰ってもしゃあない、何も変わらん。そう分かっているのに。
アイツはウチを呼び止めた。熱くなった体のために、ウチを求めた。
がちゃり、とドアノブを回した。
「お待たせ致しました」
カウンターに客がおった。
長い黒髪を一つ結びにして、メリハリのきいた体をした女性やった。きりりとした目がウチを見る。
店内に流れる曲が変わった、いや、変わってない。
『ラプソディ・イン・ブルー』が転調する。

夜の雨

南風　こまち

ごろり、と夜空に遠雷がこだました。
甘い雰囲気を醸していたカップルが、ドアの向こうに消える。一瞬だけ口を開くラブホの内側は、終わらない夜を演出する色合いだった。
雨粒でキャメルの火が消え、味がゆっくりと死んでいった。死んでしまったそれを水溜りに吐く。肺の中に冷たく湿った空気が流れ込む。
私は、どこで間違えたのだろうか……。
すれ違う車の灯に視界が眩み、気怠げに瞼を動かす。
喉の渇きを覚え、行く当てを探す。路地の奥にぽつん、とバーの看板が見えた。
足を速める。雨が靴に浸み込んで、ぎゅうと音を立てる。
ドアを開け、閉める。外套を脱ぐ。穏やかなマスターの女声が出迎えてくれた。
腰を下ろし、ふぅと息を吐いた。
カウンターに肘をつき、目線を下にやる。投げ出した仕事用の鞄が目に入った。
「……辞表出すか」
思わず独り言つ。出しても仕方ない、何も変わらない。そう分かっているのだが。
マスターを呼び止める。雨で冷えた体のために、アイリッシュコーヒーを求めた。
ことり、とグラスが差し出された。
「お待たせ致しました」
トイレから客が出てきた。
黒い癖っ毛をショートにして、小柄ですらりとした体躯をした女だった。丸くかわいらしい目が私を見る。
店内に流れる曲が変わった、いや、変わっていない。
『ラプソディ・イン・ブルー』が転調する。

「ふむ、それは酷い話だな」
「やろ！？　ほんま、やってられんわ……」
　女性は梅辻と名乗った。さっき店に入ってきたばかりの相手に、ウチはガンガンギャアギャアと愚痴った。
「そんでもって、縛りの次はローソクやとぉ？　図に乗んなや、このエロガキ！　こっちは痛いばっかりで一つも気持ちよくないんやボケ！　って言うてやったんよ。そしたら、お前みたいな貧相な体なんてこっちから願い下げや、って言われてなぁ。大喧嘩になってしもうて」
　ノリノリなＢＧＭに背中を押され、ウチはアイツのことをぶちまけた。見ず知らずの相手にわめくのはリスキーでもあり、それがまた気持ちよかった。
「ほんま、ムードも何もありゃせんわ」
　ウチは吐き捨てるように言って、セブンスターの箱を探った。空やった。見かねた梅辻さんが一本くれた。
「あ、おおきに。優しいんやな、あんた」
　新しい煙草に火を灯し、普段と少し色合いの違う紫煙を上げるウチの横で、梅辻さんは遠い目をしながらアイリッシュコーヒーを飲む。
「にしても、梅辻さんってきりっとしてカッコええなぁ。優しいし。ウチのヒモに代わって彼氏にならん？」
　梅辻さんは軽い苦笑いを浮かべた。アルコールのせいか頬が少し赤らんでいる。
「優しいなんて褒められたのは何年振りだろうな。一介の淋しい女だよ、私は」
　意味がよく分からんかったのを、カクテルグラスを空にすることでごまかした。
「なぁ、今度は私の話を聞いてくれるか？」
「お、ええで。聞かせてや」

＊

「ふむ、それは酷い話だな」
「やろ！？　ほんま、やってられんわ……」
　女は鶴迫と名乗った。既にだいぶこの店で呑んだようで、放たれる愚痴はとどまるところを知らなかった。何でも、同居している彼氏と大喧嘩をして飛び出してきたそうだ。話を聞いていると、初めは体だけの関係だったのがずるずると同居に持ち込まれたようだ。
「……そしたら、お前みたいな貧相な体なんてこっちから願い下げや、って言われてなぁ。大喧嘩になってしもうて」
　景気のいい音楽に勢いづけられ、鶴迫さんは恋人のことをぶちまけた。初めて会った相手のことを延々聞くのは仕事で飽き飽きしていたが、今は不思議と引き込まれていた。この人は誰かに似ている、ような。
　ほんま、ムードも何もありゃせんわ。彼女はそう吐き捨て、煙草の箱を探った。中身は空のようだ。私は見かねて手持ちのキャメルを一本差し出した。
「あ、おおきに。優しいんやな、あんた」
　優しい、か。そう言われたのは随分久しぶりだ。旨そうにキャメルを吸う鶴迫さんの隣で、私は少しぬるくなったアイリッシュコーヒーを啜る。
「にしても、梅辻さんってきりっとしてカッコええなぁ。優しいし。ウチのヒモに代わって彼氏にならん？」
　どきりとして、頬に血が廻った。……似ている。そうだ、彼に似ている。苦笑でお茶を濁すほどに。
「優しいなんて褒められたのは何年振りだろうな。一介の淋しい女だよ、私は」
　私はそっと、すっぴんになった左手の薬指に目をやる。
「なぁ、今度は私の話を聞いてくれるか？」

＊

「私は仕事ばかりでな……」
今度はウチが愚痴の聞き役に回った。どうも仕事場での人間関係が上手くいっていないみたいだ。そのうえ、勤め先自体がかなりブラックなようだ。梅辻さんの顔をよく見ると、化粧で分かりにくいけどあまり寝ていないみたいだ。
梅辻さんはキツそうな微笑みを見せて、カクテルを飲み干した。長い一つ結びが体の真後ろで揺れた。
「そんなとこ、さっさと辞めてしまえばええやん」
ウチはケロリと言ったが、梅辻さんは少し渋い表情をした。
「一人ではその、荷が重くてな」
ウチは首を縦に振って、梅辻さんは新しいキャメルを咥える。火を切らしてしまったみたいやった。
「火、無いん？　これ使いや」
ウチが差し出すライターの火に、彼女はそっと咥え煙草を近づける。少し薄くもハリの強そうな唇が、火と口紅でてらりと輝いた。
「すまないな」
「ええねん、これくらい。さっき一本もろたしな」
そう言って笑う。でも、そこから梅辻さんの表情が少し変わった。驚きと、郷愁のような。
「どないしたん？」
本人は気付いていなかったみたいで、慌てるように少し顔を背けてから言った。
「申し訳ない、その……昔の男と似ていたものでな」
意外やった。男がいそうな雰囲気やないのに。
「ほ～ん、それはぜひ聞いてみたいなぁ」
ウチは茶化したけど、梅辻さんは少し目を伏せた。

＊

「私は仕事ばかりでな、もう何年も仕事仕事だ。昔からぶっきらぼうな口の利き方しかできないせいか、後輩には懐かれず、上司には疎まれてばかりさ。それだけなら構わないが、ここ最近は終電帰りが当たり前、上司も私が断れないのをいいことにこき使うばかりさ。今日はたまたま終電前に解放してもらえた」
ふ、と自嘲の笑みを浮かべてグラスを空にする。愉快な話し相手のおかげもあって、雨で奪われた体温は戻っていた。
「そんなとこ、さっさと辞めてしまえばええやん」
「全く、その通りだな。……しかし、何かをやめたり、変えたりするのは一人ではその、荷が重くてな」
頷く鶴迫さんをよそに私は煙草に火を灯そうとしたが、生憎マッチを切らしてしまった。
「火、無いん？　これ使いや」
鶴迫さんがライターの蓋を開けた。火が彼女の丸くてくりくりした目を輝かせ、瞳孔に深みを与える。一言礼を言うと、彼女はにかりと人懐こい笑みを浮かべた。
その笑みに、私は思わず彼の面影を重ねていた。
鶴迫さんは私の目線に気付いたのか、少し訝しむ表情をした。
「どないしたん？」
私はじろじろ見てしまったことを少し申し訳なく思い、少し顔を逸らした。
「申し訳ない、その……昔の男と似ていたものでな」
すると鶴迫さんは少し面食らった表情をして、そしてにやにや笑い始めて続きをせがんだ。
「別段、大した話じゃないさ……呆気ない話だ」
普通は誰にも話さない。でも、今の私は口軽だ。

＊

ウチはモヒートを、梅辻さんはカンパリオレンジをオーダーした。薄黄色と薄橙色のカクテルに満たされたグラスを合わせ、飲む。ライムとミントの爽やかさがラムに乗って喉奥に消える。

恋人とは婚約するほど仲が良かったものの、数年前に交通事故で亡くしたらしい。そこからひたすら仕事にのめり込み、今に至るそうな。

「そら、えぐいわ……」

かける言葉を失ったウチは、つまみのアーモンドを口に運んだ。気が付くと、『インスピレーション』がＢＧＭになっている。

「悪いな、辛いことを聞いてしもうて。さすがにウチはそこまでの経験は無いけど、気持ち分かるで。ちょびっとだけやけどな。それで仕事仕事て……今までよう頑張ったやん」

少しオーバーかもしれんけど、酒の勢いかも。梅辻さんも嫌そうな顔やなかった。

「お客様、そろそろラストオーダーのお時間でございます。いかがなさいますか？」

「え？　うわ、あかん！　もうこんな時間や、終電無いやんけ……まあええか」

互いに終電を逃した女二人、酒でとろけた顔に揃って笑みを浮かべるしかなかった。

ウチはマスターにおススメを聞いた。すると、コンクラーベとかいう変な名前のカクテルを紹介してくれた。

「オレンジジュースをベースにした甘めのノンアルコールカクテルで、酔い覚ましにおすすめです」

「ほな、それ二つ」

「かしこまりました」

＊

私はカンパリオレンジを、鶴迫さんはモヒートを注文した。グラスを合わせ、めいめいに薄橙色、薄黄色の酒を口に運ぶ。カンパリの渋みとオレンジの芳醇な甘さが合わさり、ほろ苦さとなって口腔を満たす。

「彼は数年前に交通事故で死んでしまって、そこから仕事にのめり込むようになった。それで今はぼろ雑巾さ。婚約まで決まり、新婚旅行の打ち合わせをしているさなかだった」

短くなったキャメルを灰皿に押し付け、火を揉み消す。いつもよりも早いペースで煙草を灰にしている。

「そら、えぐいわ……」

私の話下手が災いして、鶴迫さんとの間に沈黙が降りた。

鶴迫さんは同情してくれた。慰めてもらうのも久しぶりだ。アイリッシュコーヒーを飲んだ時のように、体の芯がじんわりと暖まった。

「お客様、そろそろラストオーダーのお時間でございます。いかがなさいますか？」

「ん？　ああ、もうこんな時間か。終電には間に合わないな、仕方ない」

互いに終電を逃した女二人、酒でとろけた顔に揃って笑みを浮かべるしかなかった。

「マスター、なんかおススメある？」

彼女は小さくも均整の取れた体をカウンターの向こうに乗り出すようにしながら聞いた。

「では、コンクラーベはいかがでしょう？　オレンジジュースをベースにした甘めのノンアルコールカクテルで、酔い覚ましにおすすめです」

〆が決まった。

＊

コンクラーベはオレンジジュースと牛乳、木苺のシロップをベースにしたカクテルやった。
「結構甘いんやな、これ」
梅辻さんもウチの言葉に釣られて飲むと、少し驚いた顔をした。
「はぁ……人生もこれくらい甘かったら、どんなにいいだろうか」
横の女性は、あまり柄にもなさそうなことを言った。
「まあまあ、人生そんなに捨てたもんやないで。ほら、こんな旨い酒が飲めるやん」
「ノンアルじゃないか、これ」
「やかましい！」
ウチはケラケラと、梅辻さんはニヤリと笑い合った。
「帰りたないなぁ……」
「行きたくないな……」
相手の顔を見る。凛々しい目がじっとウチを見つめる。
「……二人で変えてみん？」
「えっ？」
「さっき言うたやろ、『一人やと荷が重い』って。せやったら、二人ならどうやろうって」
ウチはコンクラーベを飲み干す。頭の中でアイツが何かを言おうとしたけど、もう顔すらも酔い霞で見えなかった。
「ほら、ウチもひとりぼっちやし」
彼女は黙りこくって、コンクラーベを飲み干した。
「二人で変えるって……何をだ？」
「まぁ……縁、やろか」
「縁？」
「せや」

＊

ＢＧＭはいつの間にか『フライ・ミー・トゥ・ザ・ムーン』になっていた。
「結構甘いんやな、これ」
鶴迫さんの言葉が気になり飲んでみると、想像以上に甘かった。
「はぁ……人生もこれくらい甘かったら、どんなにいいだろうか」
「まあまあ、人生そんなに捨てたもんやないで。ほら、こんな旨い酒が飲めるやん」
私らしくない泣き言に、彼女は元気に励ましてくれる。
「ノンアルじゃないか、これ」
「やかましい！」
笑い声が止み、どちらからともなく言った。
「行きたくないな……」
「帰りたないなぁ……」
相手の顔を見る。くりくりした目がじっと私を見る。
「……二人で変えてみん？」
「えっ？」
鶴迫さんはいたずらっぽく笑った。
「さっき言うたやろ、『一人やと荷が重い』って。せやったら、二人ならどうやろうって」
ウチも一人ぼっちやし、と付け加える彼女の姿に、どうしても彼の面影を重ねずにいられない。いや、自分を重ねているのか？　私は黙りこくって、半分くらいになっていたコンクラーベを飲み干す。
「二人で変えるって、何をだ？」
「まぁ……縁、やろか」
「縁？」
「せや」

＊

「今夜は帰らん。ウチは今夜限りアイツと縁を切って、あんたは明日寝坊してクソ会社と縁を切る」
「え、縁を切るって、そんないきなり」
「そんなことをすれば、ウチもあんたもひとりぼっちや。そんな寂しいのはイヤやろ？　やからお互い一緒になって、うまいこと仲良うやればええやん。な？」
アホなこと言ってんな、ウチ。けど、ウチを選んでくれたら。たぶん、帰らんでもいい。
「尻込みせんでええ。ウチがおる」
アホ言うな、の一言で切り捨てられるとも思ったけど、梅辻さんは今までになく笑い出した。涙を拭いながら頷いた。
「いいな。気に入った。お前にも私がいる」
ウチはニッと笑い、立ち上がる。
「マスター、おあいそ！」
立ってレジを済ませ、外へ。割り勘になった。
「足元、大丈夫か？　フラフラじゃないか」
「だいじょーぶらいじょーぶ！」
ドアを開けてもらうと、冷気と一緒に雨の匂いがした。
「大丈夫なわけがないだろう、ほら、つかまれ」
「あーん、梅辻さん頼りになるわ、惚れてまうでこんなん」
差し出された腕につかまろうとしたけど、目測を誤ったのと足元が滑りやすくなっていたのとで、ひっくり返りそうになった。
「おっと、ほら、言わんこっちゃない」
ウチの体を出迎えたのは冷たく濡れたアスファルトやなく、ぽかぽかで柔らかな女の肌やった。
「……あ、ありがとな」

＊

「今夜は帰らん。ウチは今夜限りアイツと縁を切って、あんたは明日寝坊してクソ会社と縁を切る」
「え、縁を切るって、そんないきなり」
「そんなことをすれば、ウチもあんたもひとりぼっちや。そんな寂しいのはイヤやろ？　やからお互い一緒になって、うまいこと仲良うやればええやん。な？」
完全に目が据わっている。しかし、私も理性が砕けるくらい飲んでいた。
この女を選んだら。恐らく、もう戻らずに済む。
「尻込みせんでええ。ウチがおる」
私は段々おかしくなると共に、この女が気に入ってきていた。ついに笑いを堪え切れず、涙を流すほど笑った。
こんなに笑うのは、あの日から初めてかもしれない。
「いいな、気に入った。お前にも私がいる」
立ち上がり、揃ってレジに向かう。割り勘になった。
鶴迫さんの足元は危なっかしく、思わず声をかけた。酒の回った陽気な返答が返ってきた。やっぱり彼とは違うんだな、と思った。いつも私が酔い潰される側だった。
ドアを開ける。ひんやりとした雨の匂いは、酔い覚ましには少し物足りない。
あまりにもふらついた歩き方を見かねて、私は腕を差し出した。
「ほら、掴まれ」
「梅辻さん頼りになるわ、惚れてまうでこんなん」
その言葉に、私の腕が一瞬遅れた。彼女の体がつんのめる。
ぽすん、と音を立てて彼女は私の胸に飛び込んだ。
沈黙を、『Lily』と名付けられたバーのネオンが照らす。
「あ、ありがとな……」

＊

「やけっぱちになって飛び出してもうて、傘が無いんよ」
すると、梅辻さんは傘に招き入れてくれた。
「ありがたいわぁ、神様仏様梅辻様やな」
茶化しつつお礼を言うと、梅辻さんは満更でもない笑顔を見せた。相合傘で歩き始める。
「しかし、この辺に他の店なんてあるのか？」
「無かったらコンビニでつまみでも買うて、そこのラブホにでも部屋を取ればええやん」
言ってから気付いたけど、割ととんでもないことを言ってのけたかもしれない。
「ばっ……な、何を！」
「あっはっは、変なこと考えたんやろ？　結構かわいいとこあるやん」
ウチはそうからかいつつ、内心ではさっきのぬくもりを思い出して少しどぎまぎしていた。
「そこまで言うなら、本当に惚れさせてやろうか？」
低い声に心臓がビクンと跳ね、えっ、と声が漏れる。
思わず梅辻さんの顔を見上げると、片頬を吊り上げてニマニマ笑っている。
「なんてな。かわいげがあるじゃないか」
「お、脅かすなや！　びっくりしたやん」
「ははは、すまんすまん」
ウチはぷうと頬を膨らませてから、一緒に笑い合った。
「そういや、駅の反対側にカラオケがあったんやけど、そこ行かん？」
「いいな。行こう」
「よっしゃ、決まりやね。ほな行こか」
楽しい夜になりそうやな……まるで、付き合い始めたばっかりの恋人同士が遊びまくる時のような。

＊

自棄になって飛び出した彼女は傘を持っていなかった。
「ほら、入るといい」
「ありがたいわぁ、神様仏様梅辻様やな」
「ふっ、何を言っている」
しかし内心では、こうやって感謝されることが嬉しかった。本当に久しぶりだ。相合傘で歩き出す。
「しかし、この辺に他の店なんてあるのか？」
「無かったらコンビニでつまみでも買うて、そこのラブホにでも部屋を取ればええやん」
私は少し慌てて、傘が大きく揺れた。
「あっはっは、変なこと考えたんやろ？　結構かわいいとこあるやん」
私はさっき胸に飛び込んできた感触を思い出し、顔の赤みを悟られまいと傘を深く下げた。何を言って反撃してやろうかと思案する。
「……そこまで言うなら、本当に惚れさせてやろうか？」
「えっ」
鶴迫さんはびっくりした表情を見せる。しかし、薄暗闇の中で微かに感じられる程度に……期待もないまぜになっていた。
「な、なんてな。可愛げがあるじゃないか」
期待の表情に、さっきの数倍くらい慌てた。どうにか誤魔化して、余裕綽々の笑みを取り繕う。
「お、脅かすなや！　びっくりしたやん」
笑いつつ軽く謝る。こちらの内心はばれなかったようだ。彼女のふくれっ面の後、笑い声は二つになった。
その後、鶴迫さんはカラオケに行こうと言い出した。こちらとて異存はない。楽しい夜にしよう。……付き合い立ての恋人同士のような、華やかな夜に。

死んでしまったユウリの話をしよう

遥　弥生

This is this.
It is a truth that I could not imaginize without lying.

ユウリが生きるのをやめた理由は、今になってもよくわからない。いや、たぶんこれといって理由はないのだと思う。ユウリは何となく消えたいと思って、消えようとしたのだ。そしてそれはとても悲しい勘違いだった。ユウリは消えられなかった。血液の温かみを失って、ずっと冷たく重くなった肉の塊が残ってしまったんだ。ユウリは空気のような人だった。そう思っていた。きっと自分を空気だと思い込んで、そのままサイダーの炭酸みたいに、夏空のペイル・ブルーのなかに消えられると考えてしまったんだろう。

b

「口に合うといいのだけれど」客人は一言断って、緑色の瓶からコルクを引き抜いた。

清潔な敷布の上にこぼさぬよう、ワインボトルの口を慎重に傾ける。思ひ河、水面に微かな泡沫を立てながら、二つのグラスは紅の液体で満たされた。一つを客人の方に渡してから、自分のものを軽くふるうと、ゆらゆらと甘美な香りが立ち昇る。グラスのへりにそっと口づけをして、その足を優しく持ち上げてやると、唇を伝って舌先に甘酸っぱさが広がってゆく。数秒ほど瞑目して、舌根から咽頭にかけてねっとりとのしかかってくる微痛を愉しむ。飲み下してからふっと瞼を開くと、同じように数十秒の放埒に身をゆだねて、頬を淡い葡萄色に染めた客人と目が合った。

「素敵なお土産をありがとう」軽く会釈をしてから、ワインをテーブルの上に戻す。仄かな天井の灯りを受けて、

スケルトン・レッドの儚い影がグラスの足元に落ちた。
「それで、」本題を切り出したのは客人の方からだった。
「話しておきたい、大切なことって何ですか」
「うん、」簡単な返事のあとに続くはずの言葉を、一瞬だけ呑み込む。客人は常よりも姿勢を正してこちらを見つめており、これから始まる物語をきちんと受け止めんという決意がうかがわれた。
「むかし亡くした、大切な人の話をさせて」

s

生きたユウリと最後に別れたのは、明け方の地下改札だった。
どうやらとっくに熱帯の仲間入りをしたらしい大都会には、午前六時を示す腕時計とは裏腹にもうじめじめとした熱が広がっていた。ぽつぽつと人通りも増えてゆくなかで、汗を流しながら行き交う有象無象を横目に、ユウリは涼しげに淡々と歩いていた。くだらないお別れをだらだらと過ごさないことが二人のルールだったから、もう少し一緒にいられてもいいかもなどという湿っぽい思いを追い出して、飄々と先を行くユウリの背中に、じゃあここで、とぽつり告げる。ユウリは振り向かずに、ただ左手だけをひらりとあげて応じた。そうして、その金髪の後頭部は人影の中に消えていった。これでいつも通りの別れだった。
ユウリと初めて出会ったのも、そういえば夏のことだった。
夕暮れ、ヒグラシのさんざめく草原にカンバスを立てて、突き抜ける青い空を描いていた。
フレームに切り取られた風景の中に、ふらりと人影が入り込んだ。ときおり吹く青い風に髪を揺らす姿は、むこうに漂う入道雲に飲み込まれるんじゃないかと思うぐらい、白かった。そのとき、この人は空気のようだ、とはじめて思ったのだった。
叫んだ。「おぅい空気さん。そこをどいてくれないか。絵が描けないから」
するとユウリは微笑みながら言い返してきた。
「面白いこと言うなぁ。空気だったら、邪魔にならないんじゃないの」
邪魔だと言ってしまったのは、あなたのことは描けないと思ったからです、と慌てた弁解を、ユウリは妙に気に入って大笑いした。それが二人の最初の会話だった。一面の水色の中に、絵具を垂らしたような雲と緑が広がっていた。
「そうだ、私はあのとき、天国を見たのかも知れない」

m

「不思議な人だったんですね」その人、と指輪の輝く細い指でパンをちぎりながら客人は微笑んだ。
自分の皿の上の一切れをつまみ上げて食むと、表面を覆っている張りのある衣服が口の中ではだけて、天つ風、滑らかな雲海のごとき身体と、小麦の芳醇な香りが流れ出した。染み出てきた唾液で微かに湿った欠片を、ごくりと飲み込んで、口元の残滓を舌先でなめり取る。「美味しい」味の感想を、聞かせるでもなく呟いてから、
「そう、確かに不思議だったのかもね」と応じる。「空気みたいな人だった。独立独歩、自由奔放、そういう感じ」
「きっと面白い人だったんでしょう。お話ししてみたかったなぁ」まあ、もし生きていらしたらこうして貴方と相対していることもないのでしょうけれど、と客人は付け加えて、冗談っぽく笑う。
「話、そうだね」客人の言葉を受けて、次の一節に進む。
「おしゃべりも好きな人だった」

a

「いま、それらしいことを言おうとしたな?」
それがユウリの口癖だった。誰よりも言葉を愛していて、誰よりも言葉が嫌いな人だった。詩のようなアフォリズムを愛好して、だらだらと構築されてゆく巧言を嫌っていたのだ。「言葉なんて詐術だ」と嗤ったせいで文芸のサークルを追い出されたという大学時代の思い出を、あまり自分の話をしないユウリの口から聞いた時には腹を抱えて笑ってしまった。でも、絵がなかなかうまく仕上がらないときは、そう言いながらもふらっと綺麗な言葉を紡ぐユウリが、ちょっとうらやましかったりもしたものだ。
ユウリは、あまりに自然に変な人だった。
例えば何か思い出話をするとき。ユウリはきまって「こ

れはほんの法螺話なんだけど、」と前置くのだった。煙草一本を吸い終える以上の長話を嫌っていた。面白がらせようとした話は大概つまらなそうに無視され、何でもないと思いながら発した言葉には、手を叩いて笑っていた。「どうとでも取れる話の方が、生存権が認められてるって気がするじゃないか」というのが、ユウリなりの行動原理の説明らしかった。二人は、いつも根拠のない言葉の中にぼんやりとつながっているだけだった。それはとても心地よいものだったけれど、ふとした瞬間に泡のように消えてしまう弱さを抱えていた。

何でだって絵なんか描くのか、とユウリに聞かれたことがあった。答えに窮した。今までそんなことを考えたことは無かったから。秋だった。木々の隙間から漏れ入る陽光に照らされた、紅葉の並木道を描いている時だった。押し黙っていると、カンバスの前に割り込まれて、「いま、それらしいことを言おうとしたな？」とニヤリと覗き込まれた。そういう人為を嫌うのがユウリらしいところだった。邪魔しないでよ、と唇を尖らせてみせたあとで、正直に「考えたこともなかった。描きたいから描いてる」と呟いた。ユウリはそれを聞くと満足げにうなずいた。

「うん。描きたいからというのはとても素敵だ。君はきっといい絵描きになるよ」

見上げると、黄金色の太陽に照らされて嬉しそうなユウリの笑顔がそこにあった。

「私は潔くなっていたのだ。私の心は変っていたのだ」

1

「羨ましいな、あなたと絵の話ができたなんて」客人は繊細に盛り付けられた皿の上の白身魚に、慎重にナイフを入れた。柔らかな身体は挿入された刃を音もなく受け入れる。こちらも同様に切り分けて口に運ぶと、ミルクのような優しい感触がふわり舌の上を転がり落ちて、鳥辺山、小さな身は煙の如く喉の奥へと消えていった。皿の上には肉体を貫かれ、あられもない姿になった魚の残骸だけがある。「味付け、上手だね」と客人の方を向くと、

「ありがとう」と微笑み返された。

「絵の話なら、君ともよくしてるじゃないか」薬指に輝く控えめなダイヤモンドを人差し指でなぞりながら問うと、

「それはそうなんだけどね、」なんか深く理解しあってるって感じがする、嫉妬しちゃうなあと、すっかりバラバラに切り崩された魚肉を口に運びながら客人はわざとらしく嘆息している。

「理解、か」自分のところにある皿に再び目をやる。魚の皮だけは昔からどうしても好きになれず、こうして身だけを先に食べ進めてしまう癖が治らずにいる。が、目の前の調理者に敬意を表して、残った部分を丸ごと口の中に放り込むと、蛇皮のような妙な感触の肌が舌の上を伝った。思い切り飲み込み、小骨が喉の奥に引っかかった気がした。

「うん、ちゃんとわかってくれていたんだと思う」

1

ユウリとは、結局どういう仲だったのだろう。

冬の夜、痛いほどに寒いときセックスすることがあった。真夜中に落ち会って、開けさしの花火を季節外れにやったとき、熱狂的にキスをした。好きなものは決して同じではなかった。でも、好きなことと、気に入らないことは、共通部分が大きかった。手をつないだり、遊園地に行ったりすることはなかった。その代わり、夜が明けるまで延々と海岸線を散歩したり、朝まで歓楽街で呑み歩いたりした。ユウリは一緒にいてとても面白そうにすることがあったけれど、ユウリが面白いと感じていたかはわからない。とてつもなく愛されていたような気もするし、ものすごく嫌われていたとしても不思議ではない。

こうして考えてみると、二人の間には初めから強い絆のようなものはなかった気すらしてくる。ユウリは空気のような存在だったのだ。

ユウリには美があった。虚無の美だ。カンバスには引き写せない、空白の清らかさがそこにはあった。生きていた頃のユウリは有意味の中におらず、絵画という記号に封じ込められることを柔らかに拒んでいた。理解することを、されることを拒む人だった。絶え間なく移ろう、空模様のようだった。

ふたり喫茶店で過ごしていたある朝のことで、窓の外には梅の花がちらつき始めていた頃だった。洗った指先

を吐息で暖めながらユウリの待つ席へ戻ろうとすると、もうもうと漂う煙のむこうに震える肩があった。灰皿の上の葉巻をつまむ指先もどことなく果敢なく映った。足が止まった。何か言わねばという気持ちと、このままここで見ていたいという気持ちが葛藤していた。立ち昇る紫煙の中、両手で顔を覆うユウリの姿は一枚の絵画だった。この似姿はきっと描けまいと思った。乾ききった初春の空気の中で、そこだけいやにしとりとしていた。

「愛してるっていう言葉は、」

好きじゃないんだ、とユウリは続けた。冬の夜、暗くしたホテルのベッドの上で聞く声は、顔を合わせていないせいか、少し頼りなげだった。

ぽつ、ぽつとユウリは言葉をつなぐ。

もっと強いつながりが欲しいと思ってしまう。

感情は、あまりに頼りなさ過ぎるから。

涙声で、詩のように紡がれていく片言隻句。

そういえば、あのときもユウリはちゃんと泣いていた。

そのことに気づいたときには、もう手遅れだった。

「ああ、小鳥が啼いて、うるさい。今夜はどうしてこんなに夜鳥の声が耳につくのでしょう」

a

「それで、」空っぽになった口で客人は問うた。

どうして亡くなったのですか。まっさらになったテーブルの上に、素朴な問いかけがふと放り出される。見上げればそこにあるだろう客人の瞳を見つめたくなくて、うつむいたまま顔を手で覆い、肩を震わせる。ごめんなさい、ゆっくりでいいから、と客人は慌てふためく。

「いや、ごめん、大丈夫」頭を下げたまま、ゆっくりと深呼吸し、落ち着かせてみせる。「わからないんだ、」

どうして死んだのか、と言おうとした時だった。

カキン、カラカラカラ

何か金属が床と衝突して高い音を立てた。

客人がテーブルの下に潜り込んで、ゴソゴソと音の正体を拾い上げる。

「あら、」と、不思議そうな声だけがテーブルクロスごしに聴こえた。

百円玉が、どうしてこんなとこに――

h

「ああ、ユウリはちゃんと生き物だったのか」

氷のように動かなくなった貌に触れた時、最初に思ったのはそんなことだった。

黄色の少し先に通り抜けて、白く冷たくなってしまった頬は、それまでユウリのからだがちゃんと気色ばんでいたことを告げていた。薄紫色の唇と、その向こうに覗く灰色の舌根からは、かつてそこに綺麗な紅色を差していたのが、ユウリを説明するのには最もふさわしくないと感じていた生命のエネルギーだったことが窺われた。何より、ステンドグラスを通じて差し込む陽光によって、すべてが極彩色に染められていた。

一瞬、人違いなのでは、と思った。

けれどもその肩から腕にかけてのあまりにも弱弱しい肉づきは、よく知っているユウリの身体だった。あれほど透明だと感じていたユウリには、ちゃんと色彩があったのだ。

ユウリは空気のような人ではなかった。ユウリは、ぼくにとっての空気だった。

すっかり固く握られた拳には一葉のメモが握られていて、何とかこじ開けた指の隙間から取り出した。

中身を見たとき、はじめてユウリの姿を絵にしようと思った。

くしゃくしゃの紙には、一言だけが書かれてあったから。

いま、それらしいことを言おうとしたな？

「はい、旦那さま。私は嘘ばかり申し上げました」

明治大学

三文文士会

2021 年新入生歓迎号

●発行：明治大学三文文士会

東京都杉並区 1－9－1

明治大学和泉校舎

●発行者：明治大学三文文士会

●表紙：石橋冬華

●編集：吉津大河